岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 169

神之脇遺跡ほか

矢掛町南山田地区県営圃場整備事業に伴う確認調査

2002

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 169

神之脇遺跡ほか

矢掛町南山田地区県営圃場整備事業に伴う確認調査

2002

岡山県教育委員会

1　神之脇遺跡全景（南から）

2　上山遺跡全景（南東から）

序

本書は、小田郡矢掛町南山田に所在する神之脇遺跡・上山遺跡の確認調査報告書です。

この調査は、矢掛町南山田地区県営圃場整備事業に先だち、事業予定地内にある埋蔵文化財の基礎資料を得て、埋蔵文化財の保護・保存と圃場整備事業との調整を図るため、平成13年度国庫補助事業として行われたものです。

岡山県の南西部に位置する矢掛町は、町の中央を流れる小田川とそれに沿って通る旧山陽道によって東西の交通が盛んで、江戸時代には宿場町として栄えました。現在も市街地には国の重要文化財に指定されている本陣や脇本陣の建物が残されており、当時の面影を今に伝えています。

このたび調査を行った南山田地区には、古墳時代後期の古墳として県内でも著名な小迫大塚古墳があります。また、隣接する里山田地区には、弥生時代の清水谷遺跡・白江遺跡・芋岡山遺跡なども知られており、周辺には重要な遺跡が数多く存在する地域です。

今回の調査の結果、神之脇遺跡では、弥生時代中期と中世の柱穴や溝などの集落遺跡に伴う遺構や、土器や石器などの遺物を発見しました。その他、今回新たに鉄滓を発見したことにより、遺跡周辺では古くから製鉄が行われていたことがわかりました。また、上山遺跡では、弥生時代中期の土器を多量に含む溝や、中世の柱穴を発見しました。

これらの調査成果を収載した本書が、学術研究に寄与するだけでなく、地域の歴史や文化財の保護・活用の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査および報告書の作成に当たっては、矢掛町役場、矢掛町教育委員会ならびに地権者の皆様に多大な御支援と御助力をいただきました。記して、厚くお礼申し上げます。

平成14年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所長　正岡睦夫

例　　言

1　本書は、岡山県矢掛町南山田地区における県営圃場整備事業に伴い、岡山県教育委員会が平成13年度国庫補助を受け、岡山県古代吉備文化財センターが確認調査を実施した神之脇遺跡ほかの発掘調査報告書である。

2　神之脇遺跡ほかは小田郡矢掛町南山田2691ほかに所在する。

3　確認調査は、平成13年度に岡山県古代吉備文化財センター職員小林利晴が担当した。面積は240㎡である。

4　報告書の作成は、平成13年度に実施し、小林が担当した。

5　鉄滓の鑑定・同定等は九州テクノリサーチの大澤正己氏に依頼し、有益な御教授を得るとともに、成果については報告文をいただいた。記して深く感謝の意を表す次第である。

6　本書の執筆・編集は小林が行った。

7　遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

8　出土遺物および図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センターに保管している。

凡　　例

1　本報告書に用いた高度値は海抜高であり、方位は平面直角座標系Ⅴによる。

2　本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺は、以下のように統一する。

遺構

トレンチ　1/60

遺物

土器　1/4　　石器　1/2

3　本報告書に掲載した遺物番号は、土器、石器にわけて通し番号を付し、石器については番号の前にSの記号を付している。

4　本報告書に掲載した土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのある図は、口径の不確かなものである。また、小片の土器が多いため傾きが不確かなものが多く、部位の不確実なものは、直行して掲載した。

5　第2・44～48図は、国土地理院の1/25,000地形図「矢掛」「箭田」「笠岡」「玉島」を複製・加筆したものである。

6　本報告書に用いた遺構・遺物の時期については、弥生時代までは、山陽自動車道建設に伴い発掘調査を実施した津寺遺跡の発掘調査報告書に準拠した。詳しくは報告書を参照されたい。

「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』岡山県教育委員会　1995年

なお古墳時代は7世紀後半まで、中世は12世紀後半から16世紀中頃までとおおまかに促えている。

目　　次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査および報告書作成の経緯と体制 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査・報告書作成の体制 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
第３章　発掘調査の概要 …… 9
　第１節　調査区の設定 …… 9
　第２節　神之脇遺跡の調査 …… 11
　第３節　上山遺跡の調査 …… 27
第４章　まとめ …… 37
付載　神之脇遺跡Ｔ３出土炉壁片の調査　大澤正己 …… 41

図目次

第１図　遺跡位置図
第２図　調査区周辺の遺跡分布図(1/25,000)
第３図　神之脇遺跡と上山遺跡の周辺地形(1/8,000)
第４図　神之脇遺跡地形模式図
第５図　神之脇遺跡トレンチ配置(1/2,000)
第６図　Ｔ１平・断面(1/60)・出土土器(1/4)
第７図　Ｔ２平・断面(1/60)・出土土器(1/4)
第８図　Ｔ３平・断面(1/60)・出土土器(1/4)
第９図　Ｔ４平・断面(1/60)・出土土器(1/4)
第10図　Ｔ５平・断面(1/60)
第11図　Ｔ６出土土器(1/4)
第12図　Ｔ６平・断面(1/60)
第13図　Ｔ７平・断面(1/60)・出土土器(1/4)
第14図　Ｔ８平・断面(1/60)・出土土器(1/4)
第15図　Ｔ９平・断面(1/60)・出土土器(1/4)
第16図　Ｔ10平・断面(1/60)
第17図　Ｔ11平・断面(1/60)
第18図　Ｔ12平・断面(1/60)・出土土器(1/4)
第19図　Ｔ13平・断面(1/60)・出土石器(1/2)
第20図　Ｔ13出土土器(1/4)
第21図　Ｔ14平・断面(1/60)・出土遺物(1/2・1/4)
第22図　Ｔ15平・断面(1/60)
第23図　Ｔ16平・断面(1/60)
第24図　Ｔ17平・断面(1/60)
第25図　Ｔ18平・断面(1/60)
第26図　Ｔ19平・断面(1/60)
第27図　Ｔ20平・断面(1/60)
第28図　畑部表採石器(1/2)
第29図　神之脇地区遺跡推定範囲(1/2,000)
第30図　上山遺跡地形模式図
第31図　上山遺跡トレンチ配置(1/2,000)
第32図　Ｔ21平・断面(1/60)・出土石器(1/2)
第33図　Ｔ21出土土器(1/4)
第34図　Ｔ22平・断面(1/60)・出土土器(1/4)
第35図　Ｔ23平・断面(1/60)
第36図　Ｔ24平・断面(1/60)
第37図　Ｔ25平・断面(1/60)
第38図　Ｔ26平・断面(1/60)
第39図　Ｔ27平・断面(1/60)・出土土器(1/4)
第40図　Ｔ28平・断面(1/60)
第41図　Ｔ29平・断面(1/60)
第42図　Ｔ30平・断面(1/60)
第43図　上山地区遺跡推定範囲(1/2,000)
第44図　弥生時代前期の遺跡
第45図　弥生時代中期の遺跡
第46図　弥生時代後期の遺跡
第47図　主な古墳群の位置
第48図　中世の遺跡

巻頭図版目次

1　神之脇遺跡全景（南から）
2　上山遺跡全景（南東から）

図版目次

図版１－１　神之脇遺跡全景（北東から）
2　上山遺跡全景（北西から）
3　上山遺跡全景（南西から）
図版２－１　Ｔ１（南西から）
2　Ｔ２（南西から）
3　Ｔ３（南西から）
図版３－１　Ｔ４（東から）
2　Ｔ５（北西から）
3　Ｔ７（西から）
図版４－１　Ｔ６（南西から）
2　Ｔ６北壁（南から）
3　Ｔ６下層（北西から）
図版５－１　Ｔ８（南東から）
2　Ｔ９（西から）
3　Ｔ10（南西から）
図版６－１　Ｔ11（西から）
2　Ｔ12（西から）
3　Ｔ12断面（南西から）
図版７－１　Ｔ13（南東から）
2　Ｔ14（南西から）
3　Ｔ15（南東から）
図版８－１　Ｔ16（西から）
2　Ｔ17（北東から）
3　Ｔ18（西から）
図版９－１　Ｔ19（南西から）
2　Ｔ20（南東から）
3　Ｔ３埋め戻し（西から）
図版10－１　Ｔ６埋め戻し（東から）
2　Ｔ８埋め戻し（南東から）
3　Ｔ９埋め戻し（西から）
図版11－１　Ｔ21（南西から）
2　Ｔ21土器出土状況（東から）
3　Ｔ22（西から）
図版12－１　Ｔ23（南西から）
2　Ｔ24（南から）
3　Ｔ25（南西から）
図版13－１　Ｔ26（南東から）
2　Ｔ27（南東から）
3　Ｔ28（南東から）
図版14－１　Ｔ29（南から）
2　Ｔ30（南から）
3　Ｔ23調査風景（北西から）
図版15－１　神之脇遺跡Ｔ７出土土器
2　神之脇遺跡Ｔ６出土土器
図版16－１　神之脇遺跡Ｔ12・13・14出土土器
2　神之脇遺跡Ｔ１・２・３・４・８・９出土土器
図版17－１　上山遺跡Ｔ21出土土器①
図版18－１　上山遺跡Ｔ21出土土器②
2　上山遺跡Ｔ22・27出土土器
3　神之脇・上山遺跡出土石器

第１章　調査および報告書作成の経緯と体制

第１節　調査に至る経緯

小田郡矢掛町南山田地区内の神之脇・上山地区において、県営圃場整備事業（担い手育成基盤事業）が計画されたことに伴い、井笠地方振興局から岡山県教育委員会へ依頼があった。事業予定地内には、周知の遺跡である神之脇遺跡があり、他にも遺物が散布する地区があると報告されていたため、平成10年10月に振興局・矢掛町農林課・県教育委員会との協議後、現地の分布調査を実施した。分布調査の結果、上山地区でも広範囲に土器の散布する状況が確認されたため、平成11年２月と平成13年８月に県教育委員会と振興局が協議を行い、事業予定地の内、神之脇地区8.4ha・上山地区3.7haについて工事着工に先立ち確認調査を実施することになった。

この協議にもとづき、岡山県教育委員会では、工事施工前に遺跡の規模・状況等を明らかにし、遺跡保存の協議資料を得るため、平成13年度国庫補助を受けて確認調査を実施することにした。

第２節　調査・報告書作成の体制

確認調査は、岡山県古代吉備文化財センターが平成13年11月５日から12月21日まで実施した。

また、整理・報告書の作成は、平成13年12月25日から岡山県古代吉備文化財センターにおいて調査担当者があたった。

調査・整理体制

岡山県教育委員会
　教育長　宮野　正司
岡山県教育庁
　教育次長　國定　忠克
文化課
　課　長　松井　英治
　課長代理（埋蔵文化財係長）　松本　和男
　課長代理　藤井　守雄
　主　任　奥山　修司
岡山県古代吉備文化財センター
　所　長　正岡　睦夫
　次　長　能登原　巧

＜総務課＞
　総務課長　安西　正則
　総務係長　田中　秀樹
　主　任　小坂　文男
＜調査第一課＞
　調査第一課長　高畑　知功
　課長補佐（第一係長）　平井　泰男
　文化財保護主事　小林　利晴
　（調査・報告書担当）

日誌抄

平成13年11月５日　発掘資材搬入。神之脇遺跡Ｔ11・Ｔ12・Ｔ13調査開始。

11月７日　神之脇遺跡Ｔ10・Ｔ14調査開始。

11月９日　神之脇遺跡Ｔ５・Ｔ６調査開始。Ｔ10・Ｔ13写真撮影、図面作成。

11月12日　神之脇遺跡Ｔ２・Ｔ３・Ｔ４調査開始。Ｔ４・Ｔ５・Ｔ11・Ｔ14写真撮影。Ｔ11図面作成。

11月13日　神之脇遺跡Ｔ15・Ｔ16・Ｔ17調査開始。Ｔ２・Ｔ３写真撮影。Ｔ４・Ｔ５・Ｔ14図面作成。

11月14日　神之脇遺跡Ｔ18調査開始。Ｔ16写真撮影。Ｔ２・Ｔ３図面作成。

11月15日　神之脇遺跡Ｔ19調査開始。Ｔ17写真撮影。Ｔ16図面作成。

11月16日　神之脇遺跡Ｔ８・Ｔ20調査開始。Ｔ12・Ｔ18写真撮影。Ｔ12・Ｔ17・Ｔ18図面作成。

11月19日　神之脇遺跡Ｔ１・Ｔ７調査開始。Ｔ６・Ｔ８・Ｔ19・Ｔ20写真撮影。

11月20日　神之脇遺跡Ｔ９調査開始。Ｔ15写真撮影。Ｔ６・Ｔ19・Ｔ20図面作成。

11月21日　神之脇遺跡Ｔ１・Ｔ９写真撮影。Ｔ８・Ｔ15図面作成。

11月26日　神之脇遺跡Ｔ７写真撮影。Ｔ１・Ｔ７・Ｔ９図面作成。Ｔ17～Ｔ20埋め戻し。

11月27日　神之脇遺跡トレンチ配置図作成。Ｔ13～Ｔ16埋め戻し。

11月28日　神之脇遺跡Ｔ８～Ｔ10埋め戻し。

11月30日　神之脇遺跡Ｔ２～Ｔ５・Ｔ11埋め戻し。

12月３日　神之脇遺跡Ｔ１埋め戻し。発掘資材移動。上山遺跡Ｔ21～23調査開始。

12月４日　上山遺跡Ｔ24調査開始。

12月５日　上山遺跡Ｔ25・Ｔ27調査開始。Ｔ22・Ｔ23写真撮影、図面作成。

12月10日　上山遺跡Ｔ26調査開始。Ｔ21・Ｔ24写真撮影、図面作成。

12月11日　上山遺跡Ｔ28～Ｔ30調査開始。Ｔ25～Ｔ27写真撮影。Ｔ25図面作成。

12月12日　神之脇遺跡Ｔ６・Ｔ７・Ｔ12埋め戻し。

12月14日　上山遺跡Ｔ28～Ｔ30写真撮影。Ｔ26・Ｔ27図面作成。

12月17日　上山遺跡Ｔ28～Ｔ30図面作成。Ｔ22～Ｔ25埋め戻し。

12月18日　上山遺跡トレンチ配置図作成。Ｔ21・Ｔ26・Ｔ27埋め戻し。

12月19日　上山遺跡Ｔ28～Ｔ30埋め戻し。

12月20日　神之脇遺跡・上山遺跡全景写真撮影。発掘資材後かたづけ。

12月21日　発掘資材撤収。調査終了。

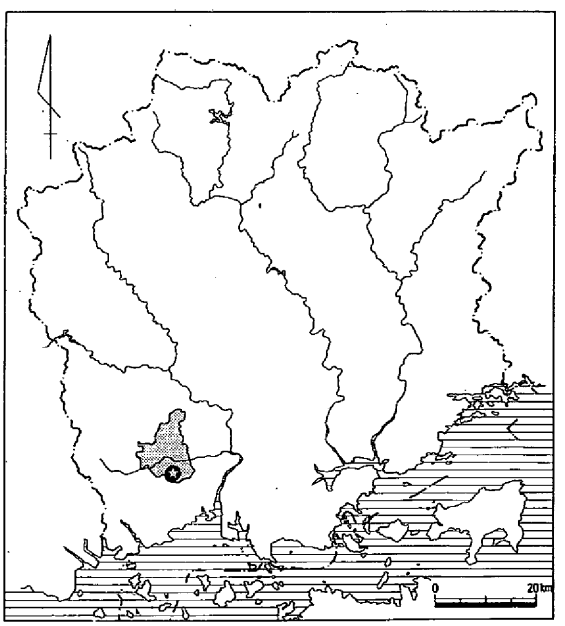
第２章　遺跡の位置と環境

神之脇遺跡・上山遺跡は、岡山県の南西部に位置する小田郡矢掛町南山田に所在する。矢掛町は、北東側を総社市と、東側を吉備郡真備町と、南側を倉敷市・浅口郡金光町・鴨方町・笠岡市と、西側を井原市と、北西側を小田郡美星町と接している。町の南部には、東西方向に小田川が流れており、その流域にはわずかながらに谷底平野が広がっている。町内の地形は、この小田川流域を除くと北側は吉備高原の南端にあたり、南側は阿部山・竹林寺山・遙照山など海抜400ｍクラスの山々が連ねるなど、その大半は山地が占めている。今回の調査区が所在する南山田地区は、遙照山山麓のすぐ北側にあり、北接する小田川の扇状地になる里山田地区とは中山によって隔たれ、一種に盆地上になる地形である。近隣する遺跡で最も古いものは、阿部山にある。旧石器時代となるサヌカイト片が出土しており、出土地点は鴨方町側になるが、神之脇遺跡のすぐ南西側に位置する(1)。

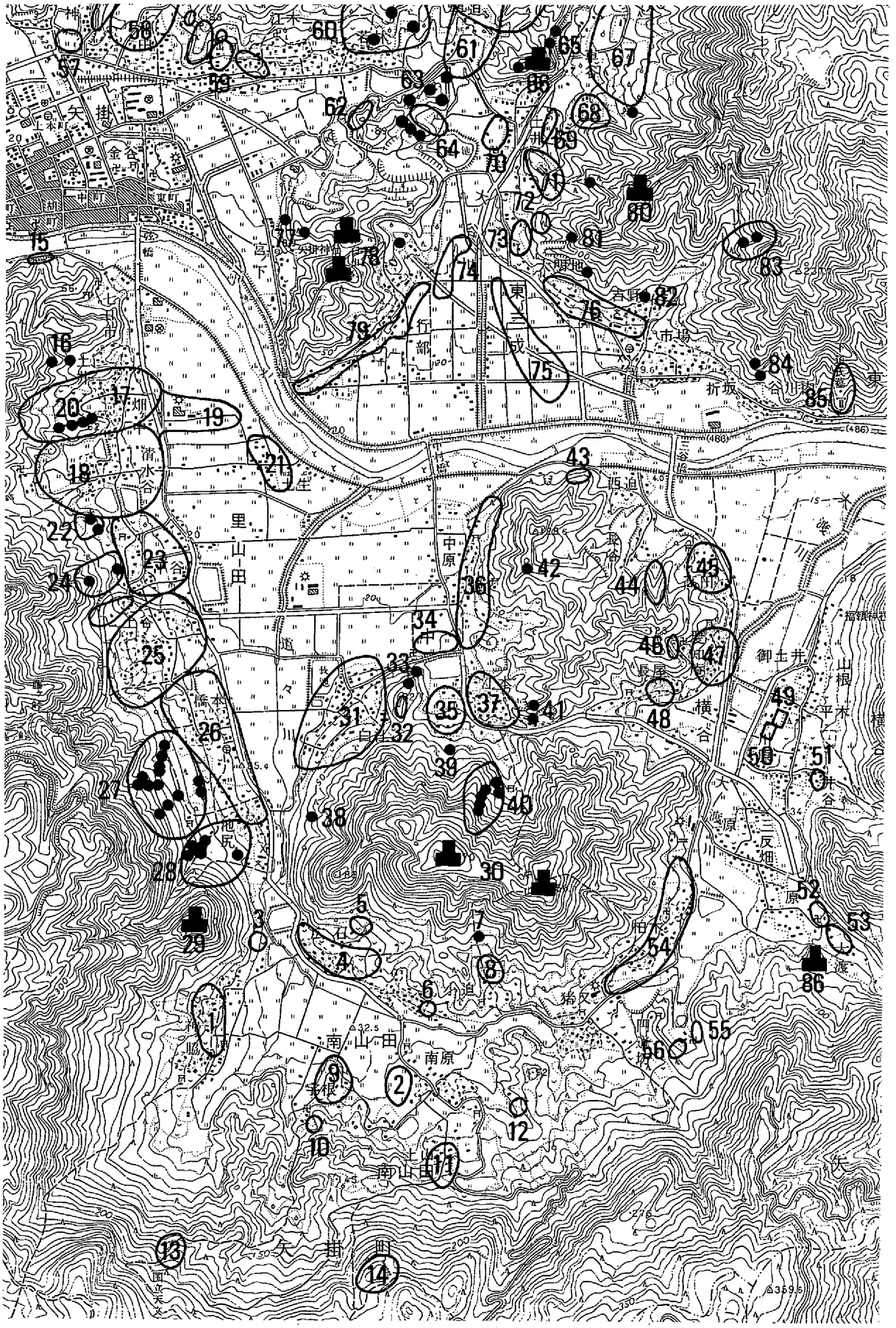
矢掛町内で最も古い遺跡の痕跡は、東三成の奥迫遺跡にある(2)。奥迫遺跡の東土井地区（69）で縄文時代早期の楕円押型文土器が出土している。縄文時代後・晩期になると同じく奥迫遺跡東土井地区、里山田の清水谷遺跡（18）(3)・里山田下谷遺跡（23）(4)、中の中池ノ内遺跡（35）(5)などで土器片が発見されている。いずれも遺構に伴う出土ではないが、その分布は広範囲にわたり、縄文時代には町内で確実に人々が営みをはじめていたことが窺える。

弥生時代に入ると遺跡の数は飛躍的に増加する。前期には、岡山県内でも注目される遺跡が現れる。清水谷遺跡一本木地区（19）である。この遺跡は1997年に圃場整備に伴う確認調査(6)によって発見された。その後1999年からの全面調査により、全貌が明らかとなった(7)。この遺跡は、南北約70ｍ・東西約60ｍの楕円形の環濠を有する集落である。環濠内には６軒の竪穴住居、30棟の掘立柱建物があり、その他いくつもの柵が存在する。発見された６軒の竪穴住居は、全て中央穴がありそれを挟むように柱が２本存在する「松菊里型住居」と呼ばれる構造である。集落を巡る環濠内には多量の土器があり、出土層位は大まかに２層に別れる。その下層は前期中葉の土器を含み、上層は前期後葉から中期前葉の土器を含む。調査担当者は、下層の土器がこの遺跡の上限で、上層の土器が下限であると見ている。この様な環濠を持った集落は、県内では他に岡山市百間川沢田遺跡にしかない。また環濠集落の西側には、同時期の水田も発見されており、集落域と生産域が同時に検出されたことも重要な側面である。

前期の遺跡では、他に東三成の吉野遺跡がある（76）(8)。この遺跡からは壺棺が発見され、身には壺、蓋には壺の底部を逆さにして使用している。中地区の白江遺跡でも土器片が出土している。



第１図　遺跡位置図



第２図　調査区周辺の遺跡分布図（1/25,000）

1	**神之脇遺跡**	2	**上山遺跡**	3	中世散布地	4	中世散布地	5	中世墓地
6	中世散布地	7	小迫大塚古墳	8	鉄滓散布地	9	中世散布地	10	中世散布地
11	中世散布地	12	中世散布地	13	竹林寺地蔵岩遺跡	14	弥生散布地	15	弥生散布地
16	土井１・２号墳	17	畑中散布地	18	清水谷遺跡	19	清水谷遺跡一本木地区	20	畑中古墳群
21	中世散布地	22	四頂山古墳群	23	里山田下谷遺跡	24	三頂山古墳群	25	里山田上谷遺跡
26	橋本散布地	27	橋本古墳群	28	池尻古墳群	29	焼山城址	30	船ヶ迫山城址
31	白江遺跡	32	芋岡山遺跡	33	芋岡山１・２号墳	34	白江遺跡（圃場整備）	35	中池ノ内遺跡
36	古墳・中世散布地	37	中世散布地	38	王子の塚古墳	39	後期古墳	40	安居寺谷古墳群
41	江本裕安寺谷古墳群	42	弥生墳墓？	43	古墳散布地	44	中世散布地	45	中世散布地
46	妙泉寺境内中世墓地	47	中世散布地	48	中世散布地	49	花房氏館址	50	庄氏館址
51	中世散布地	52	弥生散布地	53	古墳群？	54	中世散布地	55	中世墓地
56	中世墓地	57	中世墓地	58	古墳～中世散布地	59	弥生散布地	60	若林古墳群
61	奥迫遺跡	62	古墳？	63	中山古墳群	64	古墳～中世散布地	65	古墳群
66	山本城址	67	土井遺跡	68	古墳散布地	69	奥迫遺跡東土井地区	70	奥迫遺跡西土井地区
71	弥生散布地	72	大里中世墓地	73	大里中世散布地	74	奥迫遺跡赤岸地区ほか	75	奥迫遺跡沖ノ後地区ほか
76	吉野遺跡	77	蛸の頭古墳	78	茶臼山城址	79	茶臼山城堀址	80	要ガイ山城址
81	後期古墳	82	国勝寺裏古墳	83	的場古墳群	84	谷川地古墳群	85	弥生散布地
86	砦址？								

中期の前葉まで清水谷の環濠集落が存在したようであるが、中期も中葉になると遺跡は町内の各地に点在しはじめる。今回調査した神之脇遺跡・上山遺跡などをはじめ、奥迫遺跡（61）(9) や南山田竹林寺地蔵岩遺跡（13）などで土器が発見されている。遺跡は比較的奥まったところに立地するケースが多いが、清水谷遺跡 (10) や白江遺跡（31）(11) でも土器片が発見されるなど、里山田地区や中地区にも遺跡がなくなるわけではないようだ。発掘調査を実施した神之脇遺跡・上山遺跡・奥迫遺跡でも、検出された遺構は溝と柱穴のみで、この時期の竪穴住居は未だ発見されていない。

中期後葉から後期にかけて、遺跡は里山田や中、東三成といった小田川流域沿いに集約し始める。特に里山田地区は、畑中散布地（17）・清水谷遺跡・里山田下谷遺跡・里山田上谷遺跡（25）・橋本散布地（26）といった遺跡や散布地が平野部に接する尾根の東裾に連なるかたちで存在する。この内里山田下谷遺跡･里山田上谷遺跡では遺跡の一部が調査され､里山田下谷遺跡では中期後葉の土器片 (12) と向木見型となる特殊壺・特殊器台片 (13) が出土する。里山田上谷遺跡では後期の大規模な集落が予想されている (14)。

中地区には、発掘調査を行った遺跡が３つ存在する。白江遺跡 (15) (16) ・芋岡山遺跡（32）(17) ・中池ノ内遺跡 (18) である。白江遺跡では２度の調査が行われ、はじめの調査では後期前様の土器溜まりと後期後葉の溝を検出する。両者から出土した土器は、それぞれ白江Ⅰ式・Ⅱ式と名付けられる。発掘当時備中南部の弥生後期土器は「上東式」と呼ばれていたが、名称の名親となった倉敷市上東遺跡はまだ調査されておらず、この白江遺跡の資料が発掘調査で得られた上東式初の一括資料となった。２度目の調査時にも溝や柱穴など集落に伴う遺構を検出しているが、竪穴住居などは、発見されていない。

白江遺跡のすぐ東側の尾根上には、芋岡山遺跡がある。芋岡山遺跡は集団墓であり、南北幅23ｍ・東西幅10ｍの間に30基にもおよぶ土壙墓が発見される。これらの土壙墓は北側に位置する溝によって区画された内側に位置していて、主軸方位から３つのグループ分けが出来る。それぞれのグループには、埋葬時に使用されたと思われる土器類を廃棄した遺構が伴っている。これらの遺構の中には立坂型と呼ばれる特殊壺・特殊器台 (19) が含まれるものもある。またそれぞれの土壙墓は互いに切り合うものが少なく、調査担当者はこの状況を、一つの土壙墓を埋める時、次に土壙墓を掘る際の目印として石などを置いていた、と想定している。

芋岡山遺跡の北東隣にある、中池ノ内遺跡では、竪穴住居・土器棺墓・土壙墓が検出される。この内竪穴住居は１軒で、4.5ｍの円形を呈する。弥生後期中葉から後葉にかけての土器が出土する。土

器棺墓は１基・土壙墓は10基あり、検出状況は土器棺墓を中心に土壙墓が巡っている。これらの大半は後期後葉以降のものと考えられ、調査担当者は後期後葉の時期に、調査区内の土地利用が集落域から墓域に代わったと考えている。

また東三成の奥迫遺跡(20)の赤岸地区（74）では、後期の竪穴住居が３～４軒重複して発見される。

古墳時代になると、町内全域に古墳が築かれる。ただし調査が行われた例がほとんどなく、ここでは現状で確認できる古墳を地域ごとにまとめる(21)。

東三成では、奥迫に全長22ｍの前方後円墳がある。土井には箱式石棺が露出する古墳（65）がある。池内・中山にある中山古墳群（63）は、２号墳から円筒埴輪片が出土する。後期古墳では、２基ある的場古墳群中（83）の２号墳から須恵器の杯・高杯、鉄鏃などが出土する。東山には谷川地古墳群（84）、吉野には国勝寺裏古墳（82）があり、奥迫には15基からなる奥迫古墳群が存在する。また奥迫遺跡中の東土井地区では、後期になる竪穴住居も検出されており、大規模な集落の可能性がある。

矢掛では、宮の下に箱式石棺を有し、その内側が朱で塗られる蛸の頭古墳（77）がある。後期古墳では、若林に若林古墳群（60）があり、その内３号墳からは金銅製耳環と鉄刀が出土したと伝えられる。内神にも３基から内神古墳群がある。

中では、白江に箱式石棺を有する芋岡山１・２号墳がある（33）(22)。この古墳は発掘調査が行われ、１号墳では人骨と竪櫛は発見される。人骨は鑑定の結果老年男子のものとわかり、竪櫛は古墳時代中期のものである。後期古墳では、江本に江本裕安寺谷古墳群（41）があり、その内１号墳では滑石製の切子玉が出土する。安居寺谷古墳群中（40）の３号墳からは、人骨３～４体が発見され、耳環・鉄刀・鉄釘などが出土する。また中池ノ内遺跡では古墳時代前期の竪穴住居が１基検出されている。

里山田では、畑中に畑中古墳群（20）があり、内部主体等は明らかでないが、前期古墳と考えられている。土井には、箱式石棺を有する土井１号墳（16）がある。後期古墳では、池尻に６基からなる池尻古墳群（28）があり、下谷・上谷には三頂山古墳群（24）と四頂山古墳群（22）がある。橋本にある橋本古墳群（27）は、当初15基確認されていたが、現在確認できるのは12基である。古墳群中でも15号墳は別名橋本荒神塚古墳と呼ばれ、全長約20ｍの円墳である(23)。内部主体は横穴式石室で、7.5mの規模を測る。石室内には県内で６基しか確認されていない石棚が備え付けられている。この橋本荒神塚古墳は、古墳群中の他の古墳が10ｍ前後の規模であるのに対し、最大の規模を誇る。

今回調査された神之脇遺跡・上山遺跡のある南山田地区には、現在のところ、古墳は１基しか確認されていない。ただしその１基は小迫大塚古墳といい、約27～25ｍの規模をもつ方墳で、後期古墳としては町内最大規模を誇る(24)。横穴式石室の全長は10.7ｍで、奥壁は2.4ｍを測り、岡山県内でも著名な古墳である。

小林には３基からなる井出の手古墳群と、２基からなるカワテギ谷古墳群がある。内田の古屋谷にも古墳があり、宇角には塚原古墳群がある。宇内にも車谷古墳群がある。以上はいずれも後期古墳で、内部主体は横穴式石室である。

東川面には古墳が多い。僧都にある正蓮寺谷古墳群は10基からなり、全てが横穴式石室を有する後期古墳である。岡ヶ市には７基からなる岡ヶ市古墳群があり、大半が後期古墳である。その内５号墳には埴輪片が散乱している。西岡谷古墳群は７基からなり、７号墳は前期古墳と考えられている。２号墳からは玉類と甲冑が出土した。川田には６基からなる川田古墳群があり、内部主体は全て横穴式石室である。この内６号墳からは鉄刀が出土するが全壊する。仏田にある仏田１号墳も横穴式石室を

有する後期古墳である。金銅製耳環と鉄釘を出土するが全壊する。向山にも横穴式石室を内部主体とする向山古墳群がある。

江良には太郎丸古墳群や片山古墳群・日妻古墳群などがあり、奥山にある古墳は箱式石棺を有する。小田にある熊古墳群中1号墳は箱式石棺を有する可能性があり、2号墳は横穴式石室である。浅海の毎戸には毎戸古墳群があり、この内1号墳は全長約30mの円墳で、埴輪が出土する。1号墳以外は横穴式石室を有する後期古墳である。

奈良時代になると官衙と思われる遺跡が現れ、いくつかのものは調査される。毎戸にある毎戸遺跡(25)は、旧山陽道の前面に位置する遺跡である。掘立柱建物が3棟調査され、同遺跡からは多量の瓦片や底に「馬」の文字が書かれた土師器の盤などが出土する。調査担当者は、寺もしくは郡衙・駅里であると想定している。中にある白江遺跡（34）(26)では、溝の中から円面硯が出土する。トレンチ調査であったため全容は明らかでないが、調査担当者は8世紀後半頃の官衙遺跡であると推定する。里山田にある清水谷遺跡の柚木地区（18）では、総柱の倉庫跡や6.1m×3.6mを測る大型の掘立柱建物などが検出される。出土遺物の中には、畿内産の土師器や円面硯などがある。調査担当者はやはり官衙であった可能性を考える(27)。

東三成の谷川で、江戸時代の元禄12年（1699年）に、吉備真備の祖母のものと思われる銅製骨蔵器が発見される(28)。この骨蔵器の内圏には「銘下道圀勝弟圀依朝臣右二人母夫人之骨蔵器故知後人明不可移破」、外圏には「以和銅元年歳次戊申十一月廿七日己酉成」と書かれていたため、吉備真備の祖母であることが判明した。現在ではこの骨蔵器は重要文化財になっており、出土地は、国指定史跡になっている。また同東三成の藤棚瓦谷では、奈良時代の瓦が発見されている。

中世になると遺跡の分布はさらに広がり、ほぼ現在の部落配置と一致するようになる。南山田でも、広石・宇根・小迫などに散布地が現れ、今回調査が行われた神之脇遺跡と上山遺跡でも、多少の遺構・遺物が存在する。発掘調査の行われた川面館跡では、巨舘跡や溝・柱穴などを検出している(29)。毎戸の毎戸西方遺跡では、弧状溝の中から土器が出土している。東三成の奥迫遺跡の大里地区では、集落を想定している。中の中池ノ内遺跡では13世紀初めの土壙が検出され、里山田の清水谷遺跡柚木地区では10棟ほどの掘立柱建物が存在する。

中世段階で、他に注目される遺跡に山城跡がある。矢掛町にはこの山城が各地に存在し、江原の上高末城・下高末城、小林の神子山城・小林山城、東三成の要ガイ山城（80）、東川面の蓮池城、字内の瀧山城、江良の伽藍山城、浅海の龍山城、小田の神戸山城・岩屋山城などがある。今回調査が行われた南山田地区にも焼山城（29）があり、北接した中には船ヶ迫山城（30）がある。この時期備中南部最大の山城は、横谷にある猿掛城である。猿掛城はもともと庄氏の居城であり、城の南東側で平地部の御土井には館跡（49）（50）がある。この猿掛城は、庄氏と三村氏の間で行われた「猿掛合戦」の舞台であり、後に毛利氏の配下になった。1575年に毛利元清が入城、1582年の羽柴秀吉による備中高松城水攻めの際には、毛利輝元の本陣になる。同年、元清は東三成の茶臼山城（78）に移り、1600年11月の毛利氏西帰まで栄えることとなる。この茶臼山城は、山城から平城へと移る過渡期に築かれた平山城である。城の南東側には発掘調査により、大規模な堀跡（79）も発見されている。

矢掛町の城を分類すると(30)、猿掛城など本丸から以下の郭面を階段状に連ねる「階段型」、神戸山城や小林山城のように本丸を中心に周辺に郭面を広げる「周辺型」、船ヶ迫城のように2つの頂部を連ねた「連結型」があるという。

江戸時代になると、矢掛町は山陽道の宿場町として栄える。矢掛町矢掛で酒造業を営んでいた石井家は本陣職にあたった。石井家から東に400ｍ離れ、庄屋役をつとめた高草家は脇本陣となった。現在でも本陣・脇本陣は当時のまま残され、ともに国の重要文化財になっている。また小田川では、高瀬舟の渡航も盛んであった。

註

（１）『鴨方町史』鴨方町史編纂委員会　1989年

（２）高畑知功「奥迫遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』60　岡山県教育委員会　1985年

（３）杉山一雄「清水谷遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』134　岡山県教育委員会　1998年

（４）蛯原啓介「里山田下谷遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』31　岡山県教育委員会　2001

（５）尾上元規「中池ノ内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』108　岡山県教育委員会　1996年

（６）註３書

（７）直原伸二・藤江　望「清水谷遺跡＜一本木地区＞」『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告』１　矢掛町教育委員会　2001年

（８）宇垣匡雅「吉野遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』22　岡山県教育委員会　1992年

（９）註２書

(10) 註３書

(11) 間壁忠彦「岡山県矢掛町白江遺跡」『倉敷考古館研究集報』第１号　倉敷考古館　1966年

(12) 註４書

(13) 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻　第３号　1967年

(14) 浅倉秀昭「里山田下谷遺跡・上谷遺跡確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』12　岡山県教育委員会　1982年

(15) 註11書

(16) 桑田俊明「白江遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』80　岡山県教育委員会　1992年

(17) 間壁忠彦「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報』第３号　倉敷考古館　1967年

(18) 註５書

(19) 註13書

(20) 註２書

(21) 『岡山県遺跡地図』（第三分冊）　岡山県教育委員会　1975年

(22) 間壁忠彦「岡山県下の人骨を出土した小古墳六例」『倉敷考古館研究集報』第４号　倉敷考古館　1968年

(23) 平井　勝「岡山県矢掛町橋本荒神塚古墳（橋本15号墳）の測量調査」『古代吉備』第19集　1997年

(24) 藤田憲司・伊藤　晃「小迫大塚古墳」『岡山県史』第十八巻　考古資料　岡山県史編纂委員会　1986年

(25) 下澤公明「川面館跡・毎戸遺跡・毎戸西方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』５　岡山県教育委員会　1974年

(26) 註16書

(27) 矢掛町教育委員会の藤江　望氏の御教授による。

(28) 『矢掛町史』矢掛町史編纂委員会　1982年

(29) 註25書

(30) 註28書

第３章　発掘調査の概要

第１節　調査区の設定

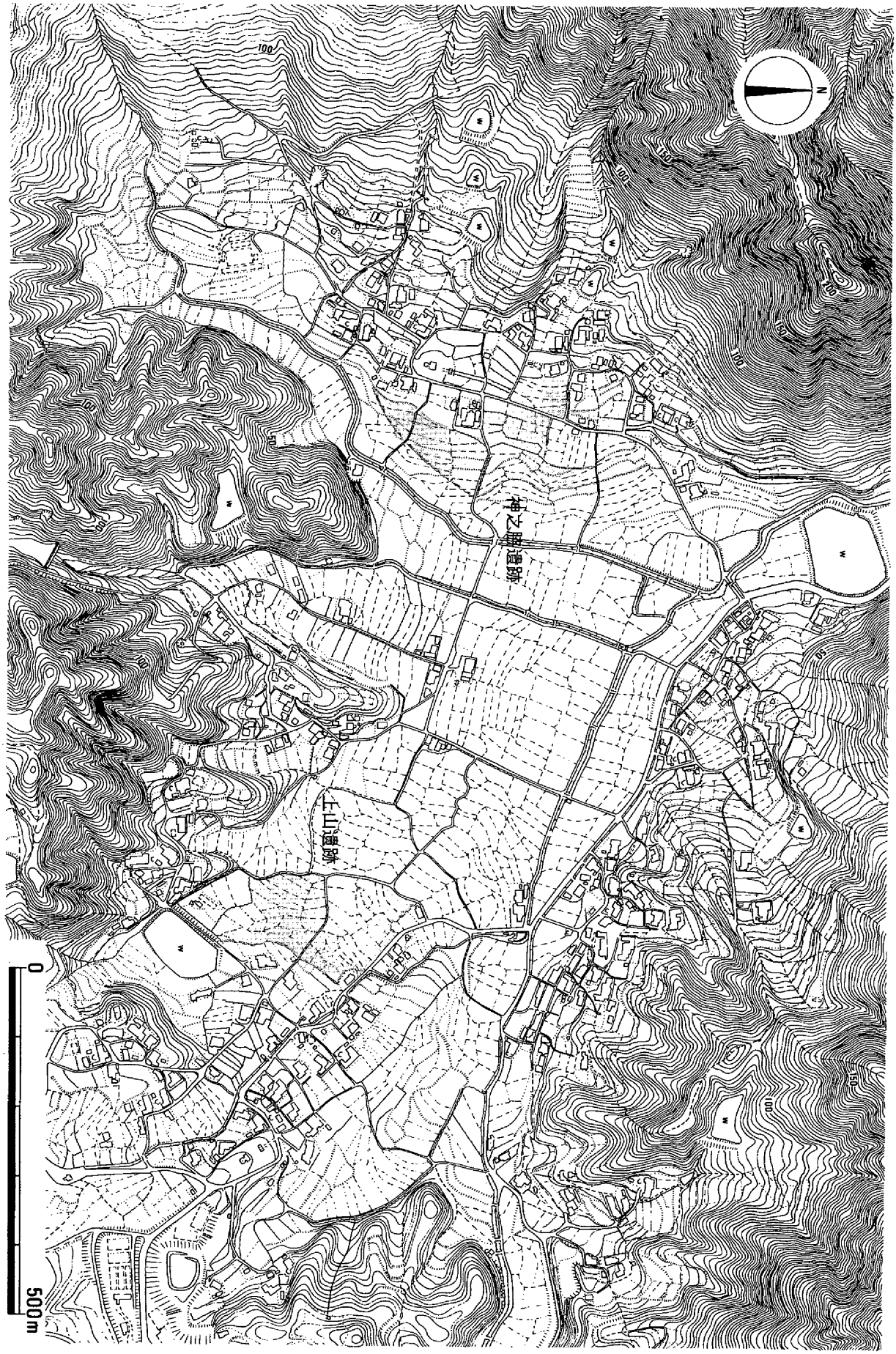
今回確認調査を行った小田郡矢掛町南山田は、南側には遙照山・竹林寺山・阿部山などの400ｍクラスの山々が連なる。北西側は焼山が張り出し、北から北東側にかけては中山があり、小田川流域の里山田地区や中地区と分断されている。四方を山々に囲まれているため、ちょうど小さな盆地のような地形である。現在では山裾を中心に民家が築かれ、民家の脇から水田や大豆など耕す畑が広がる。さらに盆地中央部の低位部にかけて水田が築かれ、現在でも田園風景が広がる。

南山田地区には、「広石（ひろいし）」・「小迫（こざこ）」・「猪又（いのまた）」・「南原（みなみはら）」・「上山（かみやま）」・「宇根（うね）」・「神之脇（こうのわき）」などの小字が存在する。今回調査予定地となったのは、南山田地区の西裾に位置する「神之脇」と南東裾に位置する「上山」である。南山田地区の圃場整備計画予定では、西側を神之脇地区と呼び、東側は宇根・上山を合わせた全体を総称して宇根地区と呼んでいた。ただし東側の確認調査予定地は、全体がすべて上山地区に入ることがわかった。そのため本報告書においては、西側は計画通り「神之脇遺跡」に、東側は小字を生かして「上山遺跡」と変更することにした。神之脇遺跡の調査対象面積は8.4haであり、上山遺跡は3.7haで、両遺跡は直線距離で約800ｍ離れる。

西裾に位置する神之脇遺跡は、『岡山県遺跡地図』（第三分冊）の「矢掛町」において、89散布地と記された地点にある。89散布地は、圃場整備予定地内を南北に走る道路の西側付近と、さらに山裾方向に向かって範囲が記される。ただし89散布地範囲以外でも土器の散布が広く見られたため、事前に分布調査を行い、道路の東側についても確認調査を実施することになった。調査は２×４ｍのトレンチを、整備予定地内に満遍なく20箇所設置し、遺跡の範囲と性格を確認することにした。なお神之脇遺跡調査範囲内には、「ニゴ田（にごた）」・「疫神免（やくじんめん）」・「馬場田（ばばだ）」・「曽根田（そねだ）」・「フケ尻（ふけじり）」などの地名が残る。

南東裾に位置する上山遺跡は、平成11年度に実施した岡山県内詳細分布調査の矢掛町分で、近接する地域から土器等の散布が見られた地区である。確認調査に先立ち予定地内を分布調査したところ、予定地内において土器の散布を確認した。このため、圃場整備予定地内全域において確認調査を実施することになった。調査は２×４ｍのトレンチを整備予定地内に満遍なく10箇所設置し、遺跡の範囲と性格を確認することにした。なお上山遺跡調査範囲内には、「原ヶ市（はらがいち）」・「師匠田（ししょうでん）」・「越根（こしね）」・「師匠田池下（ししょうだいけした）」などの地名が残る。

調査の方法は、両遺跡とも重機を使用せず人力で掘削を行う。廃土は現水田の耕作土と、それ以下の堆積土は分別しながら調査する。調査面積は、神之脇遺跡が160㎡で、上山遺跡が80㎡の合計240㎡である。調査終了後は、耕作土以下の堆積土に対してはランマーを使用し、石灰を混ぜつつ数回に分けて土を締めつつ埋め戻した。耕作土に対しては、ランマーや石灰は使用せず、限りなく調査前の状況に復旧するよう努めた。



第３図　神之脇遺跡と上山遺跡の周辺地形（1/8,000）

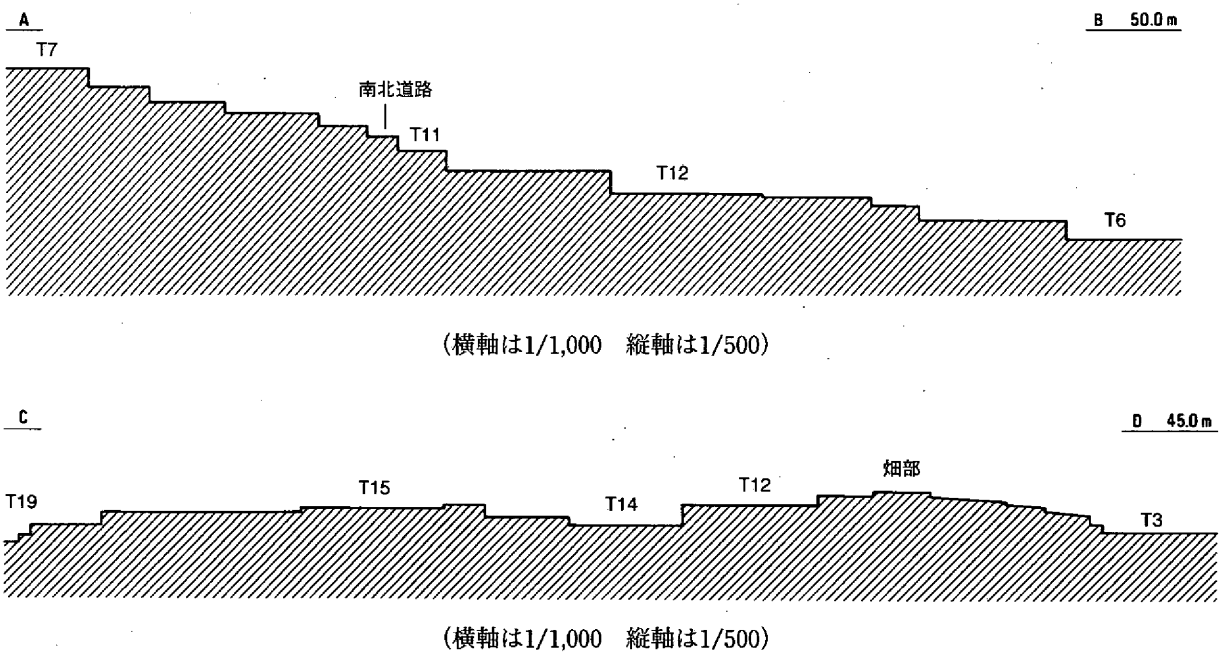
第２節　神之脇遺跡の調査

神之脇遺跡には合計20のトレンチを入れる。トレンチ名はＴ１～Ｔ20と名付ける。調査範囲内には南北に走る道路があり、この道路の西側に６箇所トレンチを入れる（Ｔ１・２・７・８・９・10)。この内真中に位置する、Ｔ７・８付近は東に張り出した地形になる。道路の東側にはさらに東西に走る道路があり、この道路の北側には８箇所トレンチを入れ（Ｔ３・４・５・６・11・12・13・14)、南側には６箇所トレンチを入れる（Ｔ15・16・17・18・19・20)。

調査予定地内の地形は、西側が高く東側に行くにつれて低くなる。Ｔ７付近からＴ６付近までは高低差が約12ｍあるが、特に南北道路付近の西側は勾配が急である（第４図上)。Ｔ７付近の現地形標高は約47ｍで、Ｔ６までの中間地点であるＴ12付近まで約８ｍ下る。Ｔ12からＴ６までの標高差が４ｍなのに対し、倍の勾配である。逆に言えばＴ12～Ｔ６間は比較的緩やかな地形であるといえる。

南北間の地形は、一定していない。Ｔ５やＴ６付近は東に張り出す地形であり、Ｔ３やＴ14付近は西側に引っ込む地形である。Ｔ16付近では再び東側に張り出し、Ｔ20に向かってまた西側に引っ込み以後東側には張り出さない。標高で見てみると（第４図下)、Ｔ３付近では約38ｍで、南側の畑部に向かうにつれて標高は上がり、最高で約40.4ｍ前後になる。Ｔ12付近では約39ｍと下がり、Ｔ13やＴ14付近では一番低くなり、Ｔ15付近で再び上がる。以後は南に行くにつれて標高は下がる。この標高の上下は、地形の東西の張り出しと一致する。これによると、現地形状においてＴ５・６付近を頂点とした、舌状に張り出す部分と、Ｔ16を頂点にした張り出し部を確認できる。

また南北道路の西側の高所では、Ｔ７が張り出しの中心となり、その南北前後に位置するＴ１とＴ９付近は西側に引っ込む地形である。Ｔ７のある区画では、調査前から土器を採集することが出来る。Ｔ３の南側にある畑部でも、土器や石器が採集できる。以上は調査前に確認できる事柄であるが、調査によって得た情報はトレンチ毎にまとめる。

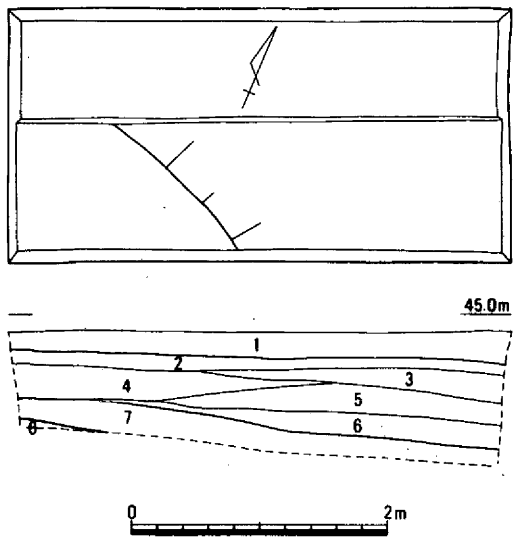


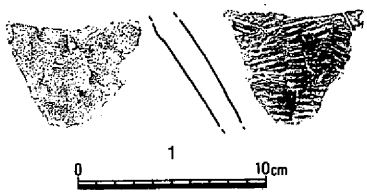
第４図　神之脇遺跡地形模式図

第５図　神之脇遺跡トレンチ配置（1/2,000）

Ｔ１（第６図、図版２－１・16－２）

Ｔ１は、調査区内で最も北西の位置にある。東側約56ｍ地点にはＴ２が存在する。現表土の標高は約44.9ｍで、北・西・南の３方は現在民家が建っており、Ｔ１の標高より高くなる。現在の地形でいうと、Ｔ１は谷部の中にあると言ってよい。調査の結果、トレンチの南東部から白灰色を呈する地山が出てきた。この地山は、調査区西際180㎝付近から急激に北東方向へ落ち込んでいる。特に６層や７層は落ち込み部に流れ込んだ堆積層になり、Ｔ１付近は過去においても谷地であったと思われる。６層から**１**が出土し、須恵器の甕の胴部になる。遺構などは存在しない。



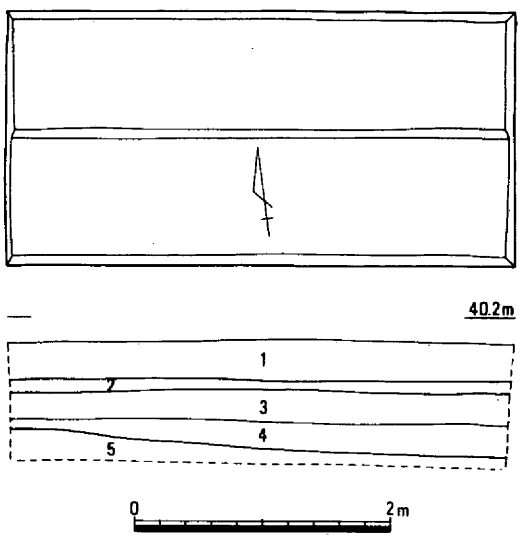


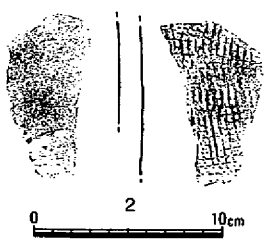
1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　暗灰色粘質細砂
3　暗灰色粘質砂質土＜Ｆｅ含＞
4　暗灰色粘質土
5　暗灰色粘質細砂
6　暗青灰色粘質土
7　青灰色砂質土
8　白灰色粘質土（地山）

第６図　Ｔ１平・断面（1/60）・出土土器（1/4）

Ｔ２（第７図、図版２－２・16－２）

Ｔ２は、調査区の北側に位置し、西側約56ｍ付近にはＴ１が、道路を挟んで東側約26ｍ付近にはＴ３が存在する。現表土は約40.0ｍであり、Ｔ１より５ｍほど低くなるが、同一の谷部になる。調査の結果、ほぼ平行に灰色の粘質土が続くが、現地表から80㎝ほど下に、青灰色の土層があられる。この土層は谷部に流れ込んだ堆積層になり、Ｔ２はＴ１同様過去においても谷地形であったと思われる。２層から**２**が出土し、亀山焼の胴部になる。



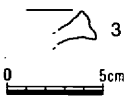


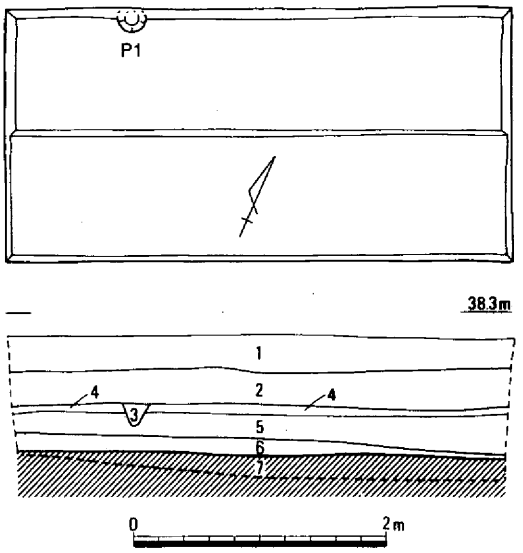
1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂（中世）＜Ｆｅ含＞
3　灰色粘質微砂
4　灰色粘質細砂＜Ｍｎ含＞
5　青灰色粘質細砂

第７図　Ｔ２平・断面（1/60）・出土土器（1/4）

Ｔ３（第８図、図版２－３・16－２）

Ｔ３は調査区北側に位置し、東側約26ｍ付近にはＴ２が、北東側約42ｍ付近にはＴ４が存在する。Ｔ３付近の現表土の標高は約38.1ｍで、南側の畑部が高くなり、Ｔ４の方向に向かって低くなっている。調査の結果、４層上面でＰ１を検出する。Ｐ１は径10㎝の円形で、深さは検出面から10㎝を測り、断面形状は尖形を呈する。Ｐ１から遺物の出土はないが、検出面などから中世のものになると思われる。６層は暗褐色を呈し、**3**などの土器が少量含まれる。**3**は弥生中期中葉の甕口縁部になることから、６層は弥生中期の包含層になる。７層は硬質となり、弥生時代の基盤層になると思われるが、遺構は検出できなかった。Ｔ３は基盤層もしっかりし、またその上面には包含層もあることから、微高地の一部である可能性が高い。また６層上面から鉄滓が出土した。この鉄滓は、６層に入るというより５層に入ると思われる。なお鉄滓の分析は付載に記載してある。



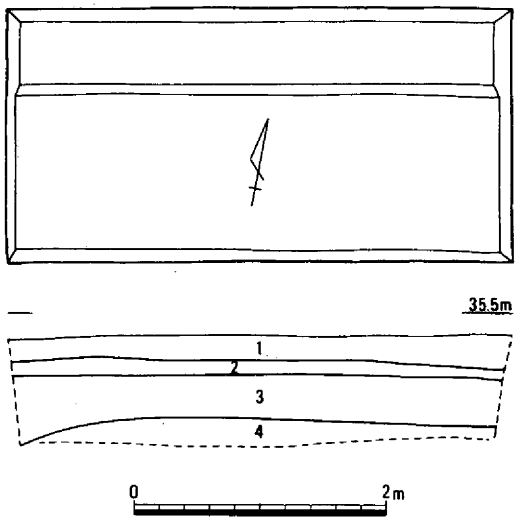


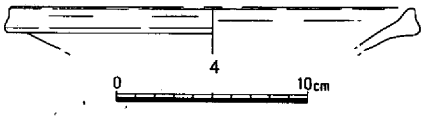
1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂＜Ｆｅ含＞
3　灰色粘質土（中世土壙）
4　灰色粘質土（中世水田層）＜Ｍｎ少量含＞
5　灰色粘質土＜Ｆｅ含＞
6　暗褐色粘質土（弥生中期包含層）＜Ｍｎ含＞
7　灰色粘質土（弥生中期面）＜礫多量含、硬質＞

第８図　Ｔ３平・断面（1/60）・出土土器（1/4）

Ｔ４（第９図、図版３－１・16－２）

Ｔ４は調査区の最も北東側に位置する。南西側約42ｍ付近には、Ｔ３が位置する。Ｔ４の現表土の標高は約35.3ｍで、Ｔ３のある南西側から下る地形の中にある。調査の結果、灰色で粘質系の土層がほぼ平行に続き、現地表の約70㎝ほど下から、硬質の土層が現れるが、いつの時代のものかは不明である。このことから考えて、過去におけるＴ４付近は、Ｔ３方向から下ってきた地形が一端なだらかに傾斜し始める地点になると思われる。遺構は検出できなかったが、**4**が出土する。**4**は弥生後期中葉の壺の口縁部になり、口縁端部を上方にややつまみ上げるタイプである。



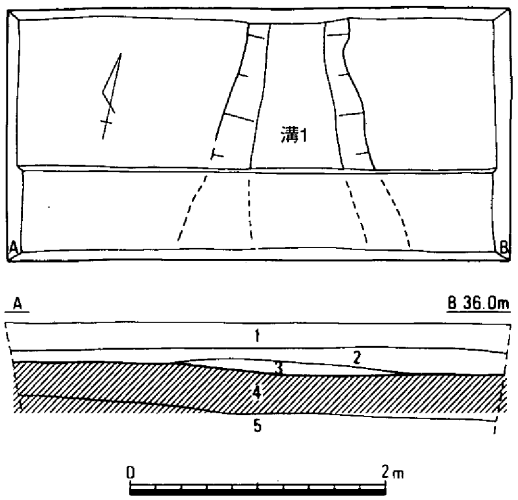


1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂（中世）＜Ｆｅ含＞
3　灰色粘質細砂
4　灰色粘質土＜硬質＞

第９図　Ｔ４平・断面（1/60）・出土土器（1/4）

Ｔ５（第10図、図版３－２）

Ｔ５は、調査区の北東側に位置する。北側約58ｍ付近にはＴ４が、南側約64ｍ付近にＴ６が位置する。現表土の標高は約35.9ｍで、東側の高位に位置する畑部から北東方向に下る地形に位置する。また南南東方向にもやや下っている。調査の結果、現地表の約40㎝下から４層にあたる黄褐色の基盤層が現れる。この４層上面では、溝１が検出される。溝１は、北北西方向から南南東方向へほぼ一直線に流れる溝である。溝の幅は北側で約80㎝、南側で約180㎝を測り、南に行くにつれて広がる。深さは約10㎝ほどしかなく、断面形状は皿状を呈する。掘り込みの形状がほとんどないことから、人工的な溝ではないと思われる。この溝からは須恵器の破片が出土するが、図化出来ないほど小片である。４層下の５層が礫を多量に含む層であるため、溝１より古い時代は、谷地形であった可能性が高い。

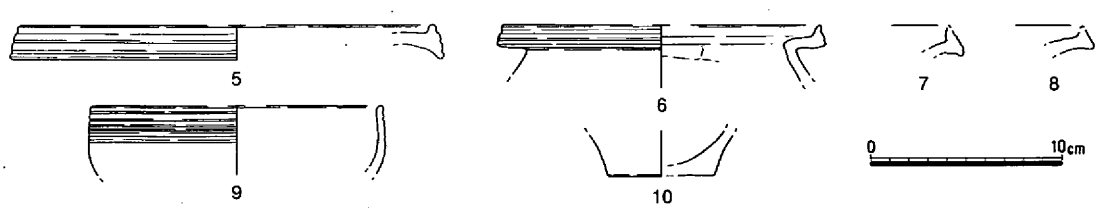


1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂（中世）＜Ｆｅ含＞
3　うすい褐色粘質土（古墳時代溝）
4　黄褐色粘質土（古墳時代面）
5　灰色粘質土＜10㎝前後の礫多量含＞

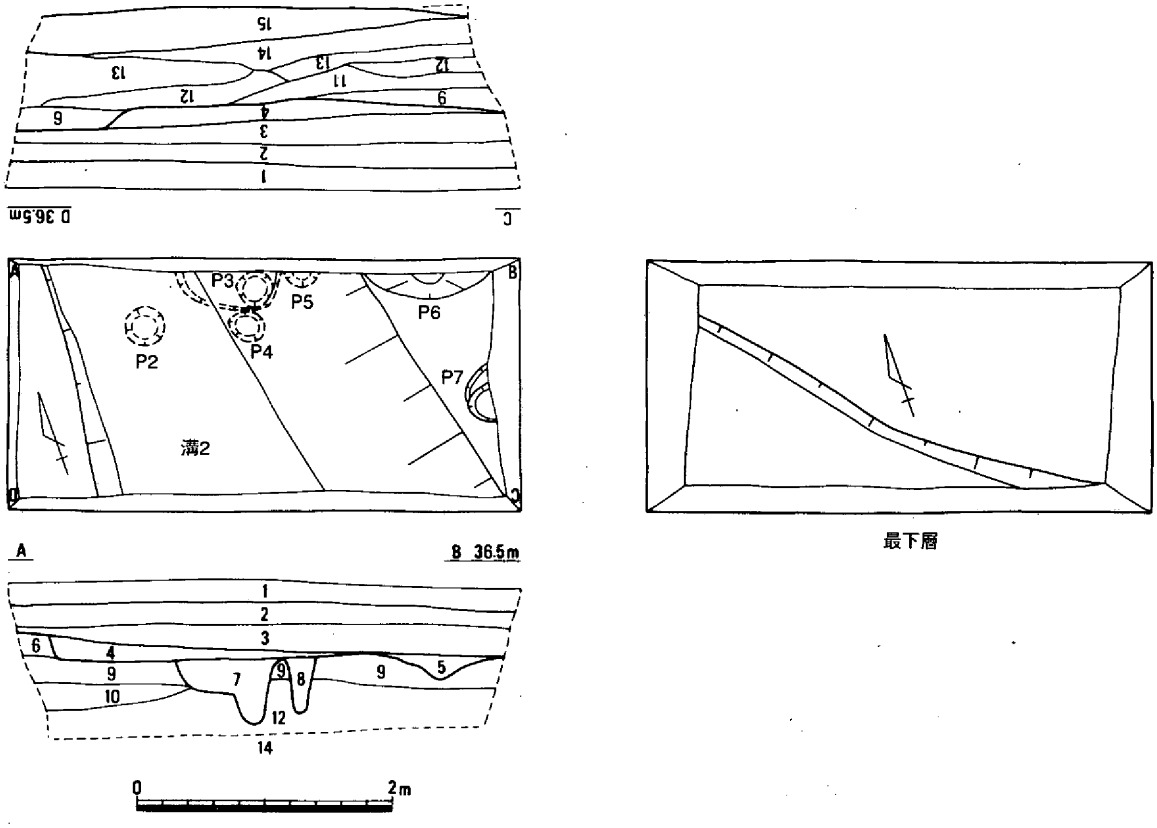
第10図　Ｔ５平・断面（1/60）

Ｔ６（第11・12図、図版４・15－２）

Ｔ６は、調査区の西側に位置する。北側約64ｍ付近にＴ５が、西側約60ｍ付近にＴ12が存在する。現表土の標高は約36.3ｍを測り、西側の高所に位置するＴ12付近からなだらかに下る地形に位置する。調査の結果、現地表約60㎝下から溝２が検出される。溝２は深さが約15㎝ほどしかなく、単なる包含層の可能性もあるが、西側の立ち上がりが顕著であることから溝と判断した。この溝は、北方向から南方向に向かってほぼ直線的に流れる。溝内からは**５～10**までの土器が出土する。**５**は壺、**６・７**は甕になり、口縁部には凹線文が施られる。**９**は無頸壺か鉢になるが、やはり口縁部に凹線文がある。これらの土器は弥生中期中葉の新式から後葉の古式になると思われる。溝２を取り除くと、９層にあたる黄褐色土の基盤層が現れ、６基の柱穴が検出できた。この内Ｐ３・Ｐ５・Ｐ７は、検出面からの深さが40～50㎝と深い。Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６は、深さが20～30㎝と比較的浅い。どの柱穴からも遺物は出土していないが、検出面などから考えて、溝２より大幅に下る時期にはならないと考える。10層以下は礫層と黄褐色土層の互層となり、安定した地形ではない。今回掘り下げた最終面では、北西方向から南東方向に落ち込む地形になり、溝２とは方向の違う地形になる。



第11図　Ｔ６出土土器（1/4）



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂（中世）
3　灰色粘質土＜Ｆｅ含＞
4　暗褐色粘質土（弥生中期溝）
5　暗褐色粘質土（弥生中期土壙）
6　暗灰色粘質土（弥生中期面①）
7　うすい暗褐色粘質土（弥生中期土壙）
8　灰色粘質土（弥生中期土壙）
9　暗黄褐色粘質土（弥生中期面②）
10　暗灰色砂質土＜礫多量含＞
11　暗灰色砂質土＜黒色礫多量含＞
12　白黄褐色粘質土（弥生中期以前の地山①）
13　暗灰色砂質土＜礫多量含＞
14　黄褐色粘質土（弥生中期以前の地山②）
15　暗灰色砂質土＜礫多量含＞
16　黄褐色粘質土（弥生中期以前の地山③）

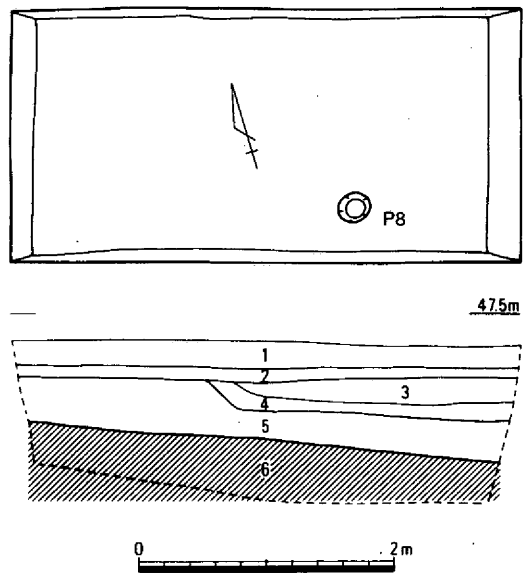
第12図　Ｔ６平・断面（1/60）

Ｔ７（第13図、図版３－３・15－１）

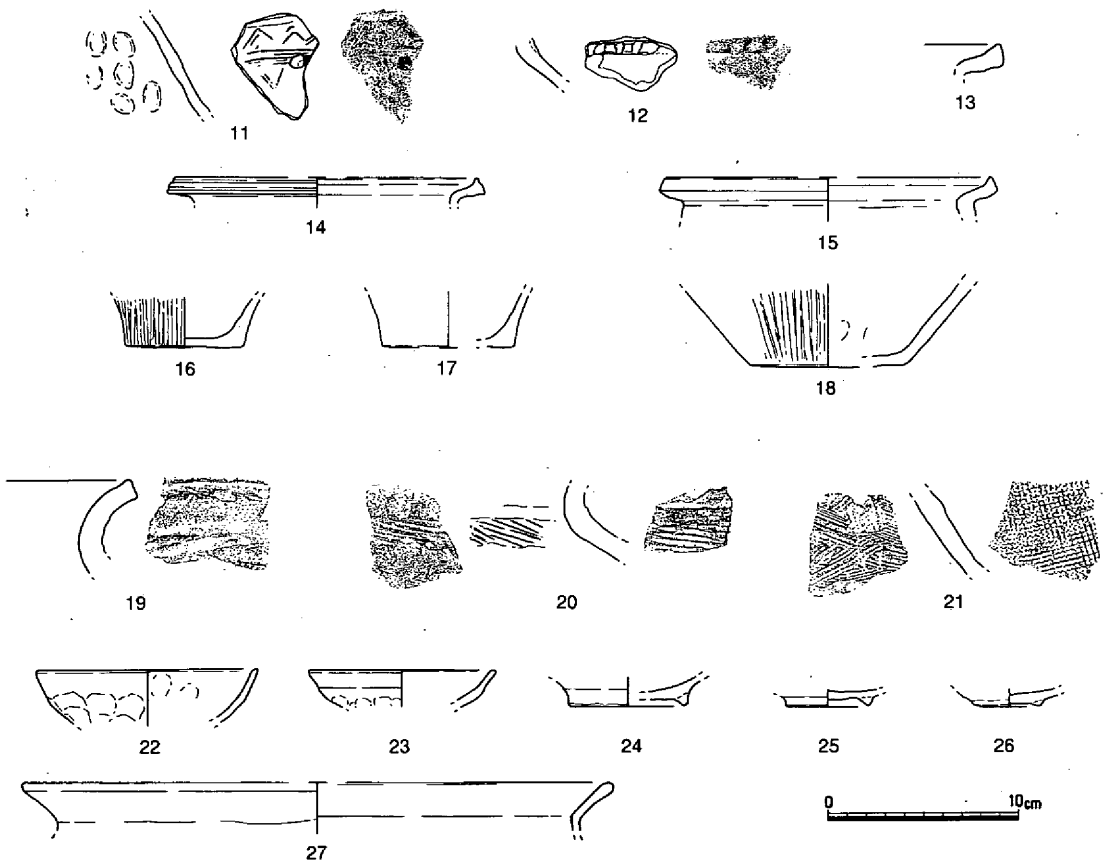
Ｔ７は、調査区の西側に位置する。北東約54ｍ付近にはＴ８があり、南西約48ｍ付近にＴ９が存在する。現表土標高は約47.3ｍで、高所となる西側から緩やかに下る地形中にある。このＴ７の区画より東側は、下る角度も急になる。調査に結果、現地表の30㎝下から包含層となる５層があらわれる。この５層からは弥生時代から中世までの土器が含まれ、層の厚さは約40㎝近くもある。６層上層では、３・４層が切り込まれており、中世段階の水田層になることが想定される。この３・４・５層には同じように土器が包含しており、**11～27**は全てこの３つの層から出土する。５層下の６層は、黄褐色土の基盤層である。この６層上面では柱穴が１基検出され、Ｐ８とする。６層はさらに50㎝ほど掘り下げたが、途切れることなく続いていた。安定した基盤層であると言えよう。Ｐ８は径13㎝程度で円形を呈し、深さは25㎝で椀形になる。遺物は出土しない。今回の調査では、柱穴を１基検出しただけにとどまるが、安定した基盤層である６層があることと、50㎝にもおよぶ包含層があることから、Ｔ

７付近は、弥生時代から中世までの遺構が密に存在する可能性が高い。Ｔ７を含め、さらにその西側は、周知の散布地に比定される場所である。Ｔ７付近は、西側から続いてきた遺跡のピークが一端終わる最東端に位置すると思われる。

出土遺物は、３～５層から出ており、弥生中期から中世まで含まれる。**11～18**は弥生土器で、**11**は壺の胴部である。上下を波形、中央を直線の櫛描文で飾る。直線文の上には、円形浮文がある。弥生中期中葉である。**12**は甕の頸部で突帯文が貼られた後、指頭圧痕で模様する。**14**の口縁部には凹線文が施られる。**13・15**はともに口縁端部が上方へわずかにつまみ上げられる。**16～18**は壺か甕の底部である。これらは中期中葉でも新式になる。**19・20**は須恵器の甕で、**21**は亀山焼になる。**22・23・25～27**は中世の土師器であり、**27**が鍋になる以外は椀である。13世紀後半から14世紀前半の範疇に全てが入る。**24**は10世紀後半になる可能性がある。



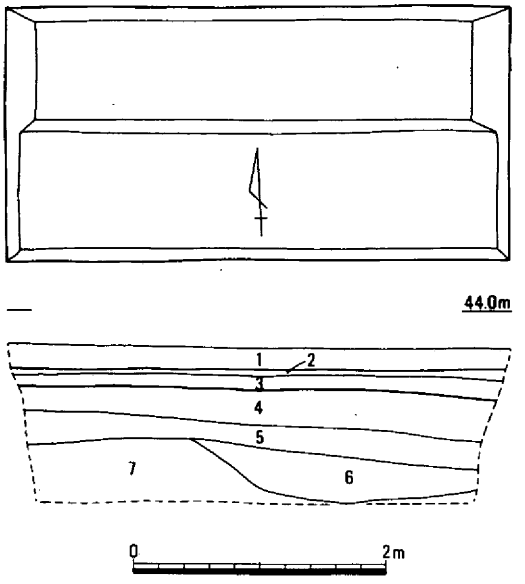
1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂＜Ｆｅ含＞
3　暗褐色粘質土（中世以降の水田層）＜Ｍｎ含＞
4　灰色粘質土（中世以降の水田層）＜Ｆｅ含＞
5　暗褐色粘質土（弥生～中世包含層）＜Ｍｎ含＞
6　暗黄褐色粘質土（弥生中期面）＜礫多量含＞



第13図　Ｔ７平・断面（1/60）・出土土器（1/4）

Ｔ８（第14図、図版５－１・16－２）

Ｔ８は、調査区の中央よりやや西側に位置する。南西側約54ｍ付近にはＴ７が、南南東側約48ｍ付近にはＴ11が、南東側約50ｍ付近にはＴ12がそれぞれ存在する。現表土の標高は約43.7ｍで、西側にある高所に位置するＴ７から急に落ち込む地形の途中にある。調査の結果、現表土の30～40㎝下から、鉄分と礫を多量に含む４層が現れる。４層以下は、礫を多量に含む層が続くことから、４層はある時期における基盤層と考えられ、それ以前の生活面は存在しない。出土遺物は３層から**28**・**29**が出土し、**28**は亀山焼、**29**は中世土師器の鍋である。**29**は14世紀初頭になる。よって４層は中世段階の基盤層になると思われる。

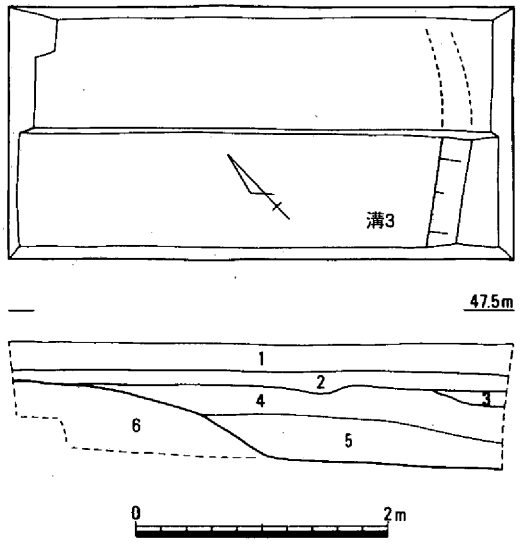


1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質土
3　灰色粘質微砂＜Ｆｅ含＞
4　灰色粘質細砂（地山）＜Ｆｅ・礫多量含＞
5　灰色粘質細砂＜Ｍｎ・礫多量含＞
6　灰色粘質土＜礫多量含＞
7　淡灰色粘質微砂＜礫多量含＞

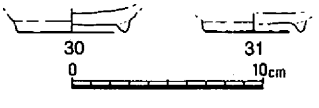
第14図　Ｔ８平・断面（1/60）・出土土器（1/4）

Ｔ９（第15図、図版５－２・16－２）

Ｔ９は、調査区西側のやや南部に位置する。北東側約48ｍ付近にはＴ７が、東側約47ｍ付近にはＴ10が位置する。Ｔ９付近はＴ７とほぼ同一レベルに位置し、現標高は約47.2ｍである。高所になる西側部から緩やかに下る地形の東端になり、東側のＴ10方向へ向かって少し勾配が急になる。調査の結果、現地表から約40㎝下に溝３を検出した。溝３は、北東方向から南西方向へほぼ直線的に走り、現在の畦に対して平行である。溝３から**30**・**31**が出土し、ともに13世紀後半から14世紀前半にかけての時期である。溝３より下層は遺構はなく、白灰色基盤層になる６層が急激に傾斜しており、谷地形になると思われる。



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂＜Ｆｅ少量含＞
3　暗灰色粘質土（中世溝）
4　灰色粘質土（中世面）＜礫少量含＞
5　灰色粘質土＜礫多量含＞
6　白灰色粘質土（地山）＜Ｆｅ含、硬質＞



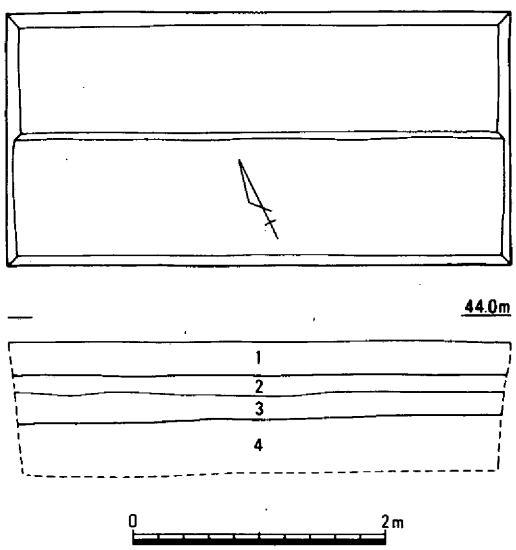
第15図　Ｔ９平・断面（1/60）・出土土器（1/4）

Ｔ10（第16図、図版５－３）

Ｔ10は、調査区中央部よりやや南西側に位置する。西側約47ｍ付近にはＴ９が、北東側約36ｍ付近にはＴ13が位置する。現標高は約43.8ｍで、西側高所にあるＴ９付近から急勾配で下ってきた地形が、一端緩やかになる箇所に位置し、東側に行くとまた下りはじめる。調査の結果、灰色の粘質土がほぼ平行に堆積しているが、遺構は存在しなかった。

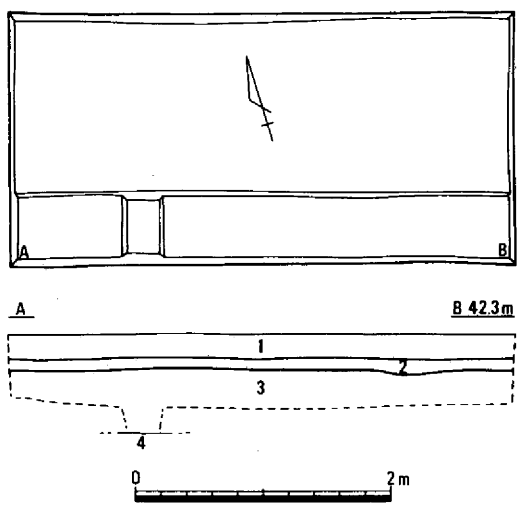
Ｔ11（第17図、図版６－１）

Ｔ11は、調査区中央よりやや西側に位置する。北北西側約48ｍ付近にＴ８が、北東約44ｍ付近にＴ12が、南南東約45ｍ付近にはＴ13が位置する。現標高は約42.2ｍで、西側高所のＴ７付近から急勾配で下った地形が、緩やかな下りになる地点である。調査の結果、現地表の約30㎝下から白色の岩盤層になり、以下の層にも続く。遺構は検出されなかった。



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂（中世面）＜Ｆｅ含＞
3　灰色粘質土
4　灰色粘質土（地山？）＜Ｍｎ含、硬質＞

第16図　Ｔ10平・断面（1/60）

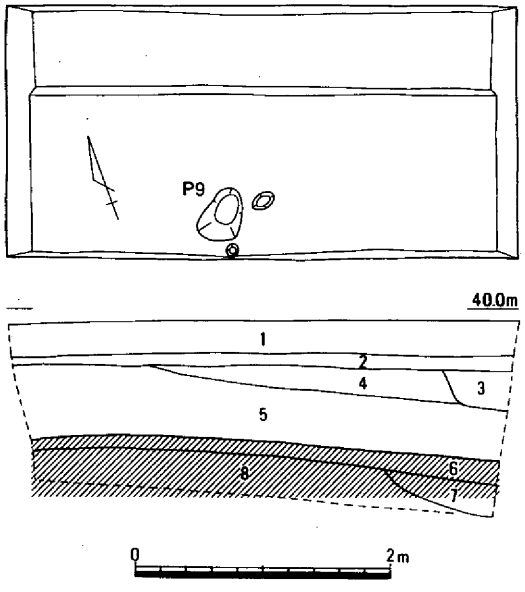


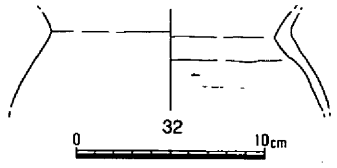
1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質土（中世）
3　白色粘質土（地山）＜硬質＞
4　白色粘質土＜礫含、硬質＞

第17図　Ｔ11平・断面（1/60）

Ｔ12（第18図、図版６－２・３、16－１）

Ｔ12は、調査区の中央部に位置する。北西側約50ｍ付近にＴ８が、南西側約44ｍ付近にＴ11が、東側約60ｍ付近にＴ６が位置する。現表土は約39.9ｍで、北側畑部がやや高く、西側にあるＴ８やＴ11方向から緩やかに下る地形の途中にある。調査の結果、現地表から約40㎝付近で中世段階と思われる溝があり、さらにその下の標高39ｍ付近で６層になる黄褐色土の基盤層が現れる。この基盤層上でＰ９とそれに伴うと思われる小柱穴を検出する。Ｐ９は長軸長20㎝・短軸長14㎝で楕円形を呈し、深さは30㎝を測る。Ｐ９からは32が出土し、時期は内面のヘラケズリ痕から、弥生後期前葉のものと判断する。６層はトレンチ内の西側から東側に向かって下っており、厚さは10～20㎝しかない。このＴ12付近は北側畑部から舌状に広がる微高地の南端にあたると思われる。



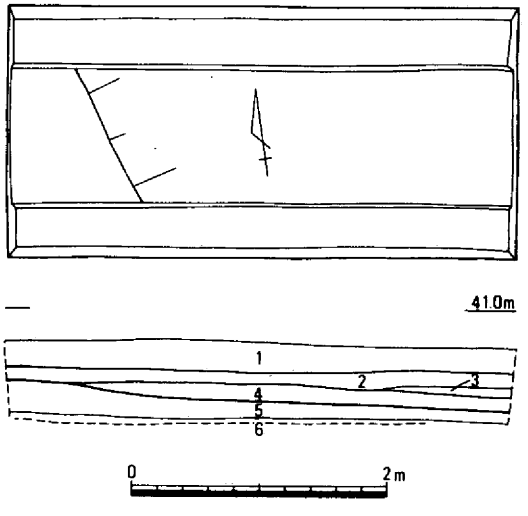


1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質細砂
3　灰色粘質土（中世遺構）
4　灰色粘質微砂（中世面）＜Ｆｅ含＞
5　灰色粘質土（中世面）＜Ｍｎ含＞
6　黄褐色粘質土（弥生中期面）
7　暗灰色砂質土
8　白灰色粘質細砂＜硬質＞

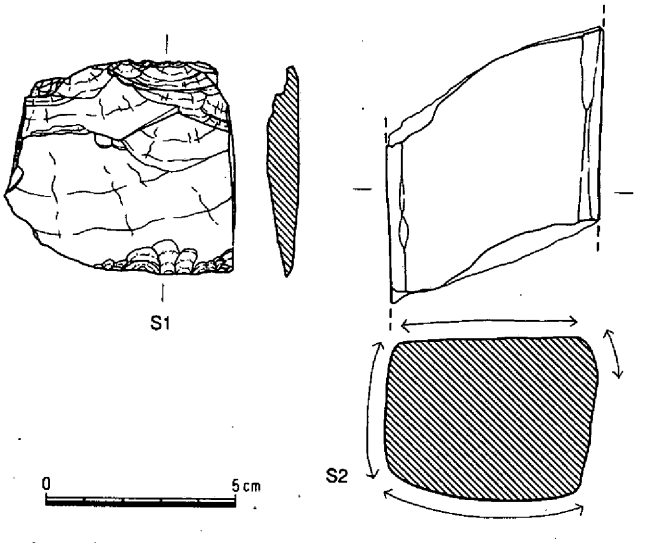
第18図　Ｔ12平・断面（1/60）・出土土器（1/4）

Ｔ13（第19・20図、図版７－１・16－１・18－３）

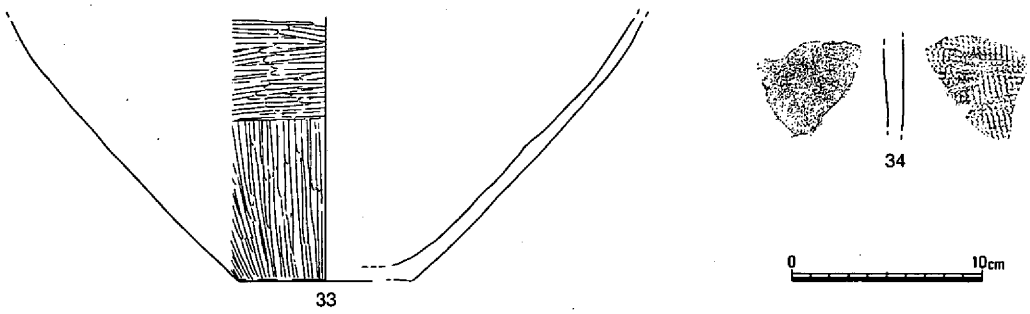
Ｔ13は、調査区の中央よりやや南西よりに位置する。北北西側約45ｍ付近にＴ11が、南西側約36ｍ付近にＴ10が、東側約49ｍ付近にはＴ14がそれぞれ位置する。現表土の標高は約40.7ｍで、北・西・南側の３方が高所になり、Ｔ14に向かう東方向が下る地形である。調査の結果、４層に若干の遺物が含まれるが、５層以下は多量の礫を含む層になり、遺構は検出できない。５層は北東方向に向かって緩やかに落ち込んでいる。過去においてＴ13付近は谷部の中になると思われ、出土遺物の大半は北側にあるＴ12などの微高地部からの流れ込みと思われる。出土遺物の内、**Ｓ１**はスクレイパー、**Ｓ２**は砥石であるが、使用痕跡が少ない。**33**は壺の底部で、時期は外面のヘラミガキの位置から弥生中期中葉の新式になる。**34**は亀山焼の破片である。



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質土（中世面）＜Ｆｅ多量含＞
3　灰色粘質土
4　暗褐色粘質土（弥生中期包含層？）＜Ｍｎ含＞
5　灰色粘質土＜10cm前後の礫多量含＞
6　灰色粘質土



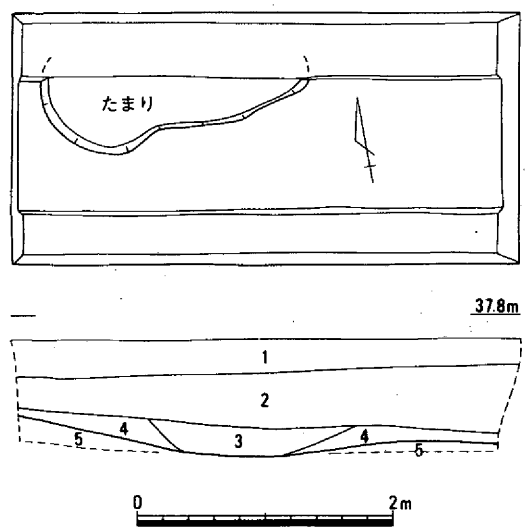
第19図　Ｔ13平・断面（1/60）・出土石器（1/2）



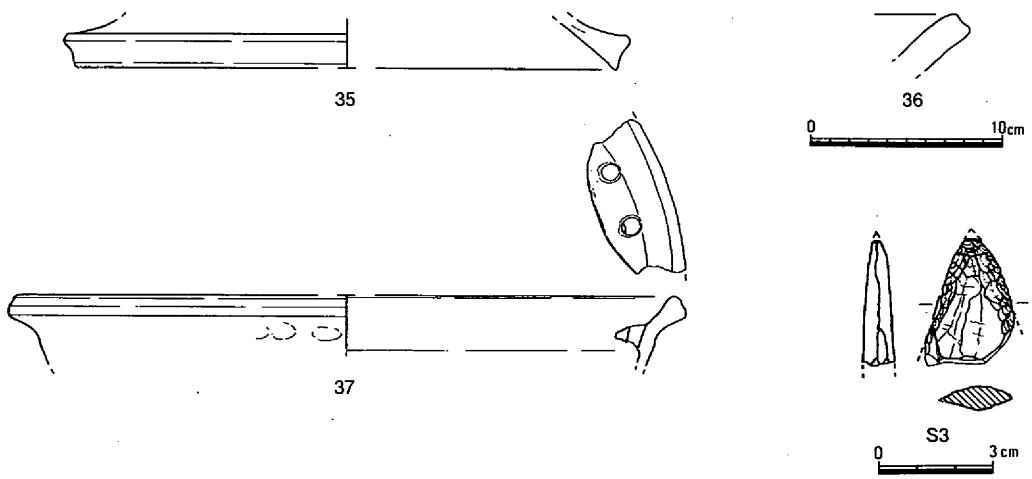
第20図　Ｔ13出土土器（1/4）

Ｔ14（第21図、図版７－２・16－１・18－３）

Ｔ14は、調査区中央よりやや南東側に位置する。西側約49ｍ付近にはＴ13が、南側の道路を挟んで約49ｍ付近にはＴ15が位置する。現表土は標高37.5ｍで、Ｔ13同様、北・西・南側の３方が高所になり、東方向に下る地形中にある。調査の結果、現地表の約60㎝下からたまりが検出される。たまりの幅は約２ｍで、深さは約20㎝程度である。覆土は砂質であり、遺物は出土しない。検出面である４層から**37**が出土することから、中世段階のものと考える。**37**は内耳をもつ中世土師器の鍋である。14世紀になると思われる。**35・36・Ｓ３**は２層から出土し、**35**は弥生後期の器台脚部、**36**は亀山焼きの口縁部である。**Ｓ３**は石槍の先端部になる。Ｔ14は西側にあるＴ13から続く谷部の中になると思われ、**35・36・Ｓ３**など２層の遺物は、Ｔ12がある舌状に広がった微高地からの流れ込みである可能性が高い。



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質土＜Ｆｅ含＞
3　灰色砂質土（たまり）
4　暗褐色粘質土（中世面）＜Ｍｎ含＞
5　黄色粘質土（地山）＜黄色礫含＞



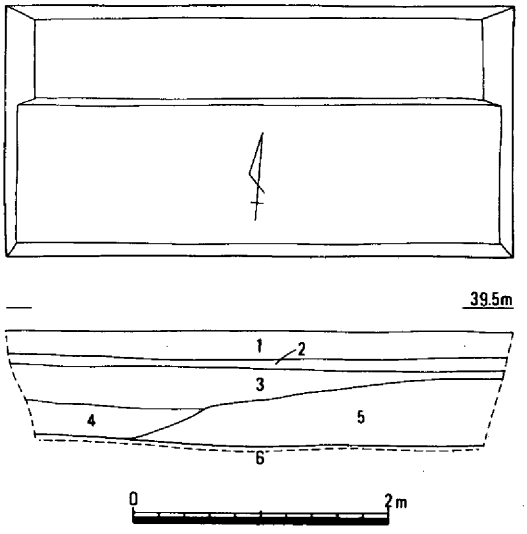
第21図　Ｔ14平・断面（1/60）・出土遺物（1/2・1/4）

Ｔ15（第22図、図版７－３）

Ｔ15は、調査区の中央より、やや南側に位置する。北側約49ｍ付近にＴ14が、東側約51ｍ付近にＴ16が、南東側約43ｍ付近にＴ17が位置する。現表土の標高は39.3ｍで、西側が高所で東側に向かって下る地形の途中にあり、北側はＴ14に向かって下っている。調査の結果、耕作土を剥いだ２層から礫を含む層になり、下層まで続く。遺構は検出されない。Ｔ15付近は谷地形となるＴ14などと比べて高所になるが、基盤層に礫が多く、また水が沸くなど、安定した地形ではない。

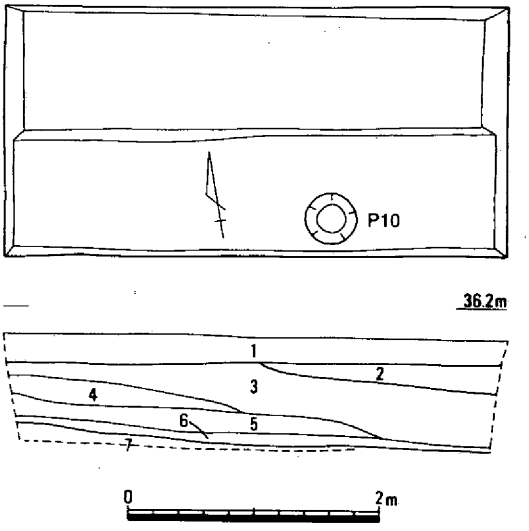
Ｔ16（第23図、図版８－１）

Ｔ16は、調査区の南東側に位置する。西側約51ｍ付近にはＴ15が、南西側約40ｍ付近にはＴ17が位置する。現表土の標高は36ｍで、西側高所に位置するＴ15方向から緩やかに下る地形の途中にある。調査の結果、耕作土下の２層は灰色の粘質土で、中世段階の水田層の可能性がある。この２層上面でＰ10を検出する。Ｐ10は径40cmの円形で、深さは15cmほどしかなく断面形状は皿形を呈する。遺物は出土しない。２層以下は鉄分や礫を多く含む層になり、水も沸く。Ｔ15同様安定した地形ではなかったことが予想され、中世になり若干の安定地形になったと考える。



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　黄褐色粘質細砂＜Ｆｅ・礫含＞
3　灰色粘質微砂＜礫多量含＞
4　灰色粘質微砂＜Ｆｅ含、礫多量含＞
5　灰色粘質土
6　灰色粘質土＜Ｆｅ含、硬質＞

第22図　Ｔ15平・断面（1/60）

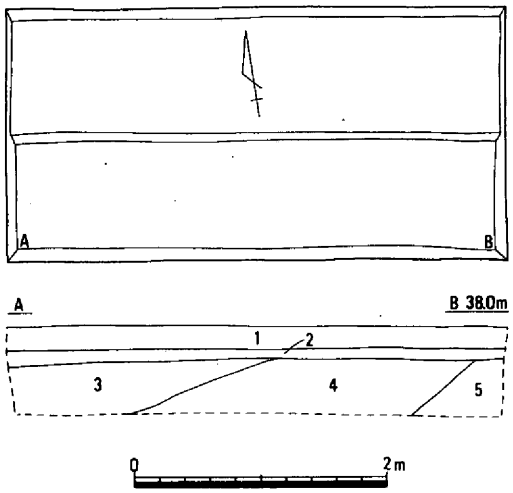


1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質土（中世面）
3　灰色粘質土＜Ｆｅ含＞
4　灰色粘質土＜礫多量含＞
5　白灰色粘質土＜Ｆｅ含＞
6　暗灰色砂質土＜Ｆｅ含＞
7　白色粘質土＜硬質＞

第23図　Ｔ16平・断面（1/60）

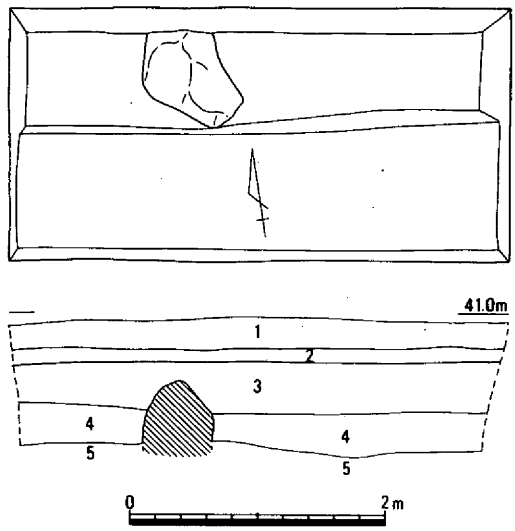
Ｔ17（第24図、図版８－２）

Ｔ17は、調査区の南東側に位置する。北東側約40ｍ付近にはＴ16が、北西側約43ｍ付近にはＴ15が、南西側約76ｍ付近にはＴ18が位置する。現表土の標高は約37.9ｍで、西側高所から東側に下る地形の途中に位置する。調査の結果、耕作土のすぐ下から礫層が続き、水も沸くなど安定した基盤層は存在しなかった。遺構も検出出来なかった。



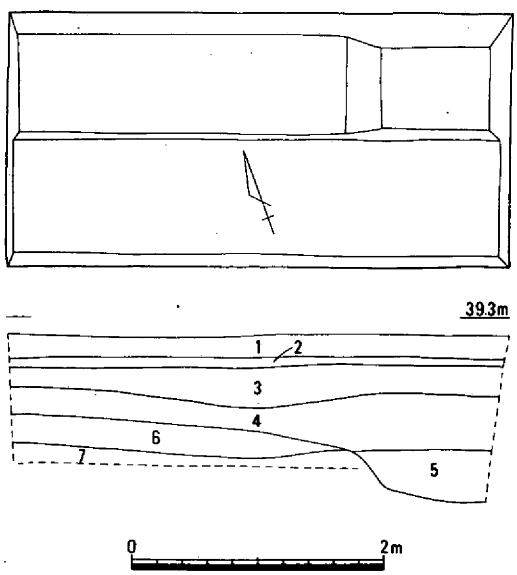
1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　暗灰色粘質微砂
3　灰色粘質微砂
4　灰色粘質細砂＜20cm前後の礫多量含＞
5　暗灰色粘質細砂

第24図　Ｔ17平・断面（1/60）



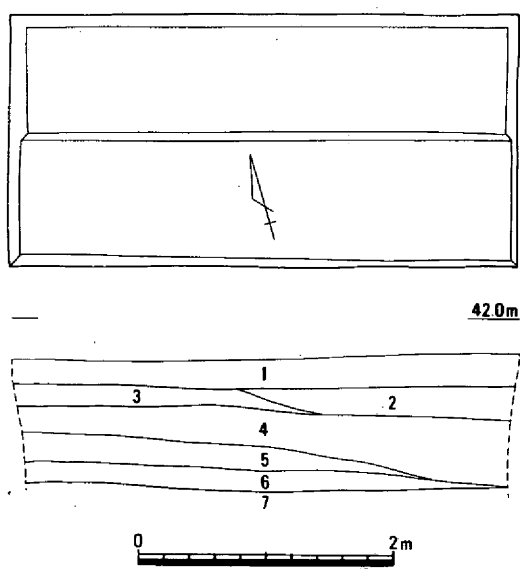
1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂＜Ｆｅ含＞
3　灰色粘質土＜Ｍｎ含＞
4　暗灰色粘質土
5　灰色粘質土

第25図　Ｔ18平・断面（1/60）



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂
3　灰色粘質土（中世面）＜Ｆｅ含＞
4　灰色粘質土＜Ｍｎ少量含＞
5　灰色砂質土
6　灰色粘質細砂＜礫多量含＞
7　黄白色粘質土

第26図　Ｔ19平・断面（1/60）



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　暗灰色粘質土＜Ｆｅ含＞
3　灰色粘質微砂＜Ｆｅ含＞
4　灰色粘質土＜Ｍｎ含＞
5　灰色粘質細砂＜礫多量含＞
6　灰色砂質土
7　灰色粘質土＜硬質＞

第27図　Ｔ20平・断面（1/60）

Ｔ18（第25図、図版８－３）

Ｔ18は、調査区の南側に位置する。北東側約76ｍ付近にＴ17が、南東側約34ｍ付近にＴ19が、南南西側約56ｍ付近にＴ20が存在する。現表土の標高は約40.9ｍで、西側高所から東側へ緩やかに下る途中の地形になる。調査の結果、３・４・５層内で大型の礫が入り込んでいる。この礫の周りには掘り方などは存在せず、露岩であろう。５層は砂質であるが硬質の土層である。表土から１ｍ以上掘り下げても安定した土層は現れなかった。遺構は存在しない。

Ｔ19（第26図、図版９－１）

Ｔ19は、調査区の南側に位置する。北西側約34ｍ付近にＴ18が、南西側約50ｍ付近にはＴ20が存在する。現表土の標高は39.2ｍで、Ｔ18などがある西側高所から南東方向に下る地形の途中に存在する。調査の結果、耕作土下の２層から若干の中世遺物が出土するが図化できるものはない。３層は中世の基盤層になるが、遺構は存在しない。３層以下を掘り下げるが、６層で礫を多量に含む層にぶつかるなど、より古い遺構面は存在しなかった。

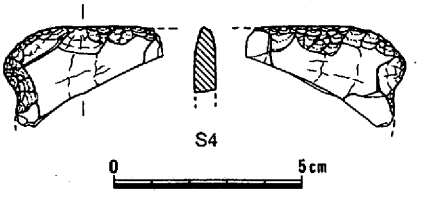
Ｔ20（第27図、図版９－２）

Ｔ20は、調査区の最も南側に位置する。北北東側約56ｍにはＴ18が、北東側約50ｍにはＴ19が存在する。現表土の標高は41.7ｍで、西側高所から東側に向かって下る地形の途中に存在する。調査の結果、耕作土下から鉄分を含む層が続く。どの層にも遺構面は存在せず、遺物もほとんど出土しない。堆積土は東側から西側に若干下っており、この傾斜は現地形とほぼ一致する。５層に礫を多量に含む層があるなど、安定した地形ではなかったことが想定される。

調査の結果

今回の確認調査の結果、遺跡の性格や広がりなどを、ある程度確認することが出来た。以下その成果をまとめる。

最も遺物が出土したトレンチは、Ｔ７である。Ｔ７からは弥生土器を中心に、須恵器・亀山焼・中世の土師器などの土器類などが多数出土した。このＴ７は、調査区の中でも最も西側に位置し、標高が高い位置にあるトレンチである。同じように調査区最西端に位置するＴ１とＴ９が、若干西側に引っ込む地形であるのに対し、Ｔ７は東側に舌状に張り出す地形であり、過去においても微高地の役割を果たしていたのであろう。今回のトレンチ内では、遺構は柱穴を１基検出したにすぎないが、特出すべき点としては包含層の厚さがある。包含層の厚さは約40cmもあり、今回Ｔ７で出土した遺物は、全てこの包含層から出土した。その内弥生土器は中期中葉のものが主流である。中期中葉の中でも**11**は神之脇遺跡の全トレンチ内で最も古い様相になり、他のものは中期中葉でも新式になる。また古墳時代の遺物や、中世では14世紀までの遺物が含まれる。このことからＴ７付近は弥生時代から中世まで長い期間中安定した土地であって、近隣には集落があったと考えられる。ただしＴ７付近から東側は勾配が急になり、Ｔ８などでは遺構面が存在しなくなる。逆に今回の調査範囲外にあたる西側は、勾配が比較的緩やかに上がっている。このことから、本来集落の中心はＴ７の西側にあり、Ｔ７付近は西側から舌状に広がっていた集落域の東端にあ



第28図　畑部表採石器（1/2）

第29図　神之脇地区遺跡推定範囲（1/2,000）

たるのではないかと予想される。『岡山県遺跡地図』（第三分冊）の「矢掛町」における89散布地の範囲は、今回の調査区の西側に広がっており、現在でも調査区西側で土器の採集が可能なことも裏付けになるだろう。

調査区の東側で遺構・遺物を発見した箇所に、Ｔ３・Ｔ５・Ｔ６・Ｔ12がある。この内Ｔ５・Ｔ６・Ｔ12では黄褐色土の基盤層を確認しており、遺構も検出される。Ｔ３は基盤層が黄褐色土ではなく、遺構も検出されなかったが、包含層があり、弥生時代中期の土器が出土する。これら４つのトレンチを結ぶと、今回圃場整備の対象外になっている畑部を中心に、舌状の広がりを見せる地形になる。本来これらは同一の微高地上になると思われる。微高地の東側に位置するＴ５・Ｔ６では、ほぼ南北方向の溝が走っている。この２つのトレンチは、ほぼ同一レベル上にあり、調査区内では最も低い位置にあたる。２つのトレンチはともに、黄褐色土基盤層の下層が砂利層を含む層になっている。どちらも溝の存在した時期以前は、安定した土地とは言えず、谷部であるか落ち込み部であっただろう。弥生時代以降になって安定した基盤層が現れたとしても、そこに築かれた遺構は溝であり、微高地の縁辺部であったろう。Ｔ６では溝の他に柱穴が６基検出され、その数は今回の調査で最も多い数である。微高地境に建物が存在したのであろうか。標高的に高い位置にあるＴ12では、柱穴の中から弥生時代後期の土器が出土する。溝などの遺構はなく、基盤層以下の地層にも砂利などは含まれない。Ｔ５・６などに比べれば安定した土地であり、より集落等の中心に近かったと予想される。この微高地の中心は、４つのトレンチを結んだ中心にある畑部であったと考えられ、現在でも遺物の散布が見られる。第28図に載せた石器（**Ｓ４**）は、その畑部出土のもので、石包丁である。この畑部は現地形においてもＴ３やＴ12よりも高い位置にあり、今回調査した４つのトレンチは、この畑部を中心にして広がる微高地の北・東・南端にあたるのであろう。

調査によって判明したＴ７付近の微高地と畑部を中心にした微高地は、それぞれ違うものと考えた。その根拠としては、２つの微高地を結ぶんだ線上にあるＴ８・Ｔ11には遺構面がなかった事が挙げられる。またＴ７からＴ６までの標高差は12ｍあり、その内Ｔ12付近より西側が８ｍ差なのに対し、Ｔ６方面へは４ｍの標高差しかない。Ｔ７～Ｔ11間の方は勾配が急なため遺構はもともとなかったと考える。２つの微高地の時期は、Ｔ７の方が若干古くなる。ただしＴ７は中世まで土器が続いており、畑部を中心とした微高地より、長く安定した土地であったのだろう。

他のトレンチを概括すると、Ｔ１は北東方向に下る谷部になると思われる。この谷はＴ２付近で一端平坦な地形に変わり、Ｔ３付近では微高地に変わる。Ｔ３より東側は再び下る地形になり、Ｔ４では安定した地形は見られない。

Ｔ９は南西側に下る谷部の始まりになる。ただし中世段階にはある程度安定した土地になり、溝が築かれている。Ｔ９より下った谷はＴ10付近で一端平坦な地形になるが、再び下りはじめ、Ｔ13・Ｔ14方向まで下っている。Ｔ13とＴ14は同一の谷部になるが、すぐ北側にＴ12などがある微高地があり、この微高地から弥生時代の遺物が流れ込んだものと思われる。ただしＴ14では中世のたまりや遺物などが出土しており、少なくとも中世段階には谷地形ではなくなっていただろう。

Ｔ16付近は東側に舌状に張り出す地形であったが、基盤層が安定していなかったためか遺構・遺物の密度は顕著ではない。Ｔ16より南側のトレンチは、Ｔ16で柱穴状の遺構が１基ある以外遺構は存在しない。どのトレンチも礫を多量に含む土層にぶつかり、水などが沸く地形である。そのためＴ５・Ｔ６付近の微高地と同じように東に張り出す地形であっても、遺跡が載らなかったのであろう。

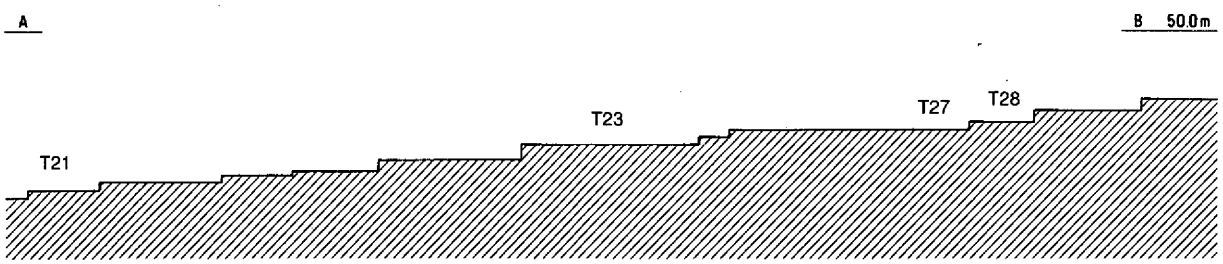
第３節　上山遺跡の調査

上山遺跡には、合計10箇所にトレンチを入れる。トレンチ名はＴ21～Ｔ30と名付ける。調査区周辺の地形は、南東方向が高く、北西方向に行くにつれて低くなっている。そのため調査区内でも標高が高い南東方向周辺にトレンチを集中させ、北西側は比較的少なくなる。トレンチは調査区中央付近を東西方向に走る農道を中心に、南北それぞれ５トレンチずつ入れる。

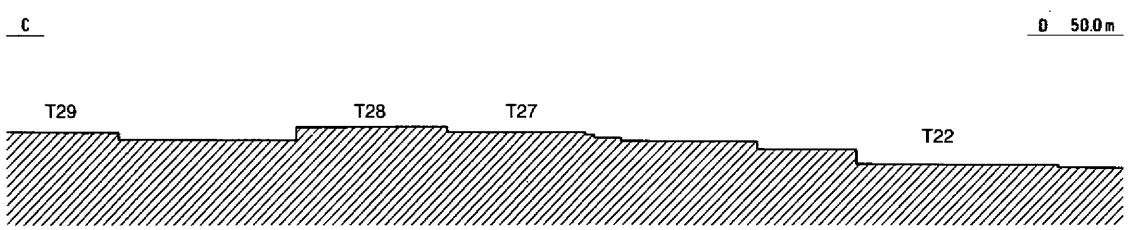
調査区南東方向の標高は高くなっているが、地形のあり方は一定ではない。Ｔ24・25・27・28付近は、舌状になり北西方向に張り出している。Ｔ21・Ｔ22・Ｔ23などは、この張り出し部から北西に下る地形の途中にある。Ｔ21はその中でも最も低位部に位置する。Ｔ26は張り出し部から西側へ下る地形の途中にあり、Ｔ21同様低位部に位置する。Ｔ29・Ｔ30は、張り出し部から南側に下る地形の途中にあり、トレンチ付近より南側は、再び上がる地形である。

標高差を見ると、調査区の南東側の高所で約44.5ｍあり、北西側のＴ21付近では39.8ｍである。この標高差は、神之脇遺跡の東西標高差に比べれば緩やかである。第30図上を見てもらうと、地形は南東側から順次緩やかに下り、Ｔ21にいたっている。平面的に見た時にあったＴ27・Ｔ28付近の張り出しは、断面的には見あたらず、微高地を形成するかどうか微妙な所である。これを南北方向でも見たのが、第30図下である。北側から行くと、Ｔ22付近は最も低くなる。Ｔ22付近から順次上がっていく地形は、Ｔ27・Ｔ28付近でもっとの高くなる。Ｔ28より南側は再び地形が下り、Ｔ29付近からまた順次上がる地形である。現地形に見られる張り出し部は、南北方向の断面では顕著な差となってあらわれるが、神之脇遺跡で見られた張り出し部のように際だった存在ではない。Ｔ27・Ｔ28周辺を調査前に踏査しても、神之脇遺跡ほどに遺物を表採出来なかった。またＴ21付近は北東方向が高く、南西方向が低くなっている。特に南西方向の地形は、近接する区画であるのに１ｍ近くの標高差がある。以上が調査前に明らかとなった情報である。

以上のことを踏まえた上で各トレンチ毎に調査結果をまとめる。



（横軸はS＝1/1,000　縦軸はS＝1/500）



（横軸はS＝1/1,000　縦軸はS＝1/500）

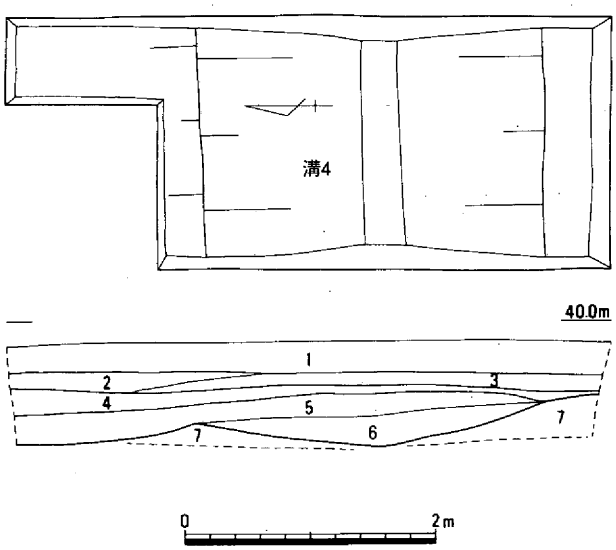
第30図　上山遺跡地形模式図

第31図　上山遺跡トレンチ配置（1/2,000）

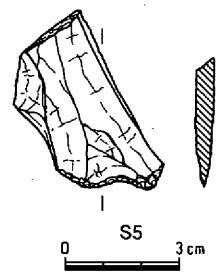
Ｔ21（第32・33図、図版11－１・２、17、18－１・３）

Ｔ21は、調査区北西端部に位置する。東側約76ｍ付近にＴ22が、北東側約70ｍ付近にＴ23が存在する。現表土の標高は39.8ｍで、南東側の高所から北西側へ下る地形の途中に位置する。調査の結果、現地表の約40cm下から５層にあたる暗褐色の粘質土が現れる。この５層には多量の弥生土器が含まれ、その大半は弥生中期中葉のものである。この層は、トレンチ内南端の50cm前後の地点から北側に向かって落ち込む。５層の北側端を確認するためトレンチの北側を一部拡張したが、層はさらに北側へ続いていた。北側にある畑部は、すでに５層下部より低く、この層が残存する可能性は少ない。５層直下の６層は暗灰色の砂質土で、やはり弥生中期中葉の土器を包含する。５・６層内には多量の礫が含まれるため、この２層は流れ込みによる覆土になると思われ、溝になると判断した（溝４）。溝４は調査区内では東側から西側へ直線的に流れ、ほぼ現在の水田の区画に平行している。Ｔ21のある現在の水田は北東方向に鋭く曲がっており、現在の地形が過去の地形の影響によって構成されているなら、溝４も北東方向に曲がる可能性が高い。７層は砂質土になり、溝以外の遺構は確認できない。

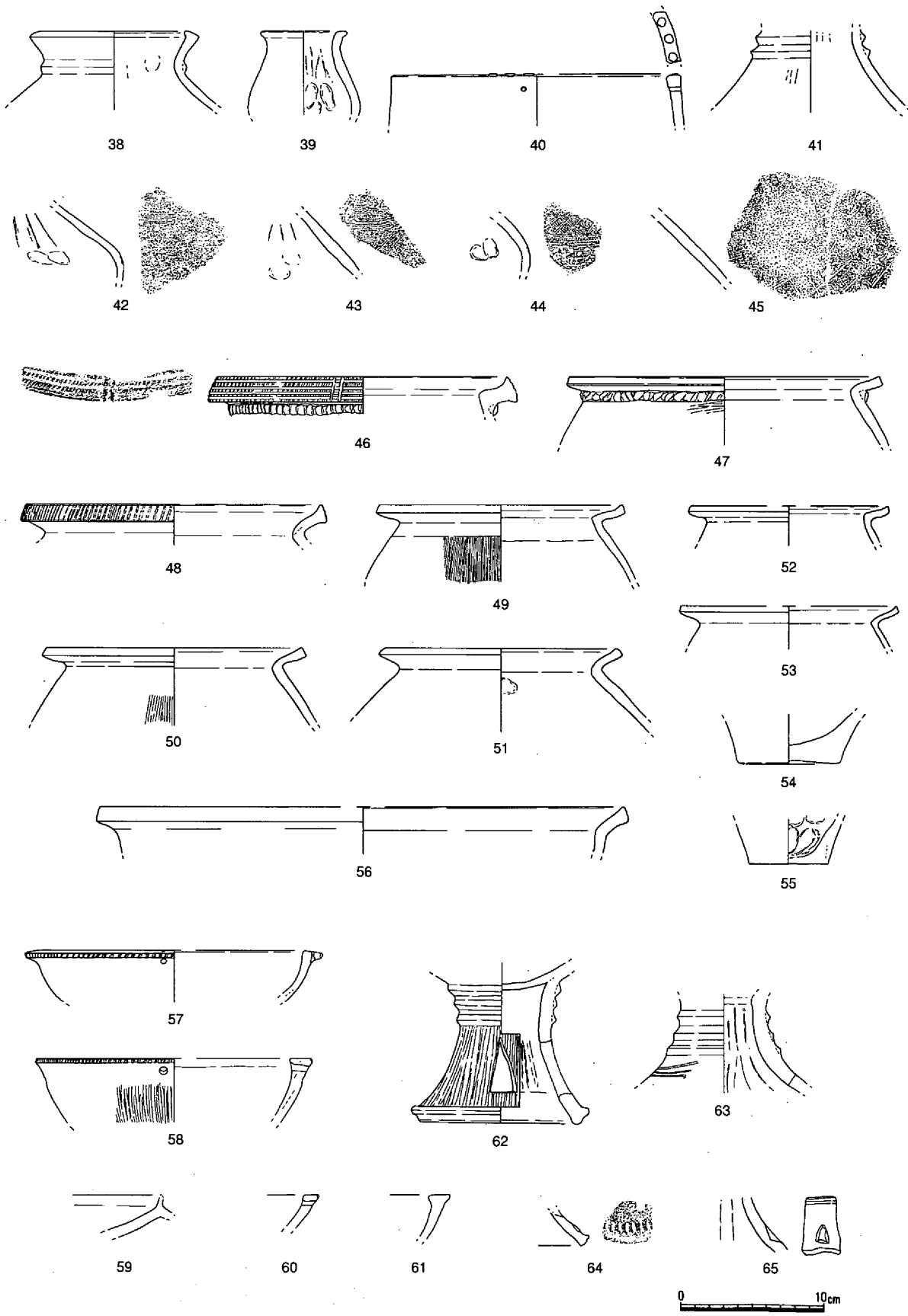
出土遺物は全て溝４から出土した。**Ｓ５**はスクレイパーもしくは石包丁の未製品である。**38～45**は壺である。**38**は頸部に突帯を貼り付け、口縁部は逆ハ字に短く開き、端部を内側につまみ上げている。**41**は頸部に突帯が２本付く。**40**は無頸壺で、口縁端面に円形浮文が並ぶ。**42～45**は胴部片であるが、**42・43・45**は波状と横直線の櫛描文に格子文が、**44**は格子文に横櫛描文が施られる。**39**は短頸の壺で後期になるかもしれない。他は全て弥生中期中葉である。**46～55**は甕になり、**47・49・52・53**は口縁端部を上方にややつまみ上げている。**50・51**も端部をつまみ上げるが、さらに口縁部は肥厚している。**48**の口縁端面には直線刻みがあり、**47**の頸部には突帯の上に指頭圧痕文があり、中期中葉のものである。**46**の口縁端面は直線刻み後に凹線文が施なれる。弥生中期中葉の新式か後葉の古式になる。**56**は鉢で、後期になる。**57～65**は高杯で、**57・58・60・61**など身が深いタイプである。**57・58・60**は端部に刻み目文があり、**57**は縦に、**58・60**は横に円孔が開けられる。**62・63**は脚部で、ともに円盤充填で、突帯が付く。以上は弥生中期中葉であるが、身**59**・脚**64・65**など後期の範疇になるものもある。



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂＜黒色ブロック多量含＞
3　灰色粘質微砂＜Ｆｅ含＞
4　灰色粘質微砂
5　暗褐色粘質微砂（弥生中期の溝？）＜10cm前後の礫多量含＞
6　暗灰色砂質土（弥生中期の溝？）＜10cm前後の礫多量含＞
7　灰色砂質土＜黄色土少量含＞



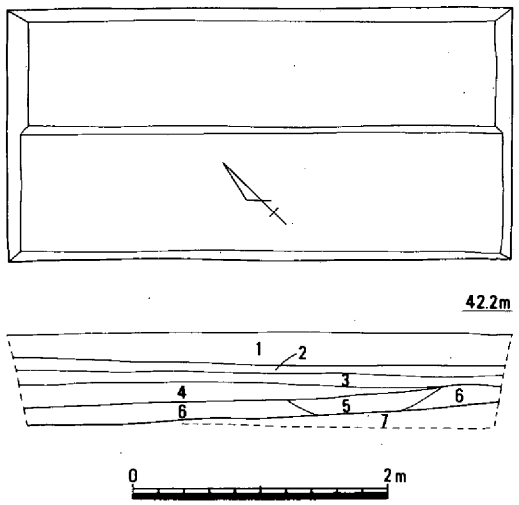
第32図　Ｔ21平・断面（1/60）・出土石器（1/2）



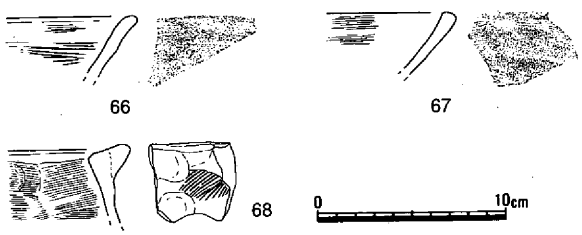
第33図　Ｔ21出土土器（1/4）

Ｔ22（第34図、図版11－３・18－２）

Ｔ22は、調査区北側よりやや東部に位置する。西側約76ｍ付近にＴ21が、南西側約52ｍ付近にはＴ23が、南東側約51ｍ付近にはＴ24が存在する。現表土の標高は約42ｍで、高所の南東側から北西側で下る地形の途中にある。調査の結果、土層堆積は東側から西側に概ね下ることが確認できた。６層は黒灰色の粘質土で、**66～68**の中・近世土器を包含する。この層は河道などの底に堆積する層に類似しており、Ｔ22全体は中世段階の河道の中になるのかもしれない。出土土器中**66・67**は土師器の鍋である。13世紀後半から14世紀前半のものである。**68**は外耳が付く焙烙になる。近世段階になるであろう。



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂＜Ｆｅ含＞
3　灰色粘質土＜Ｍｎ含＞
4　灰色粘質細砂
5　灰色礫層（中世）＜黒色礫多量＞
6　黒灰色粘質土（中世包含層）
7　淡青灰色砂質土



第34図　Ｔ22平・断面（1/60）・出土土器（1/4）

Ｔ23（第35図、図版12－１）

Ｔ23は、調査区の中央部に位置し、北東側約52ｍ付近にＴ22が、南東側約42ｍ付近にＴ27が存在する。現表土の標高は約42.2ｍで、南東側高所から北西側に下る地形の途中にある。調査の結果、堆積土は現地形と同様の傾斜をし、３層では礫を多量に含む層に変わる。遺構は存在しない。

Ｔ24（第36図、図版12－２）

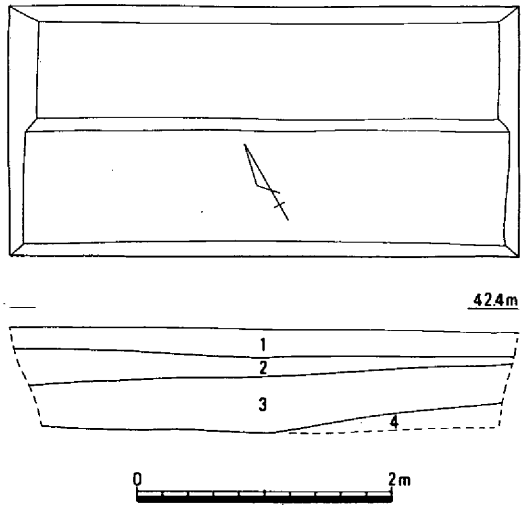
Ｔ24は、調査区の北東側に位置し、東側約32ｍ付近にＴ25が存在する。現表土の標高は約44.1ｍで、南東側高所から北西に下る地形の途中にある。調査の結果、堆積土はほぼ平行で２層から若干の中世土器片が出土する。４層からは礫を含む層になる。遺構は存在しない。

Ｔ25（第37図、図版12－３）

Ｔ25は、調査区の北東端に位置し、西側約32ｍにはＴ24が存在する。現表土の標高は45.4ｍで、調査区北東側では一番高所になる。調査の結果、現地表の40㎝下から白灰色粘質土の４層になり、４層は硬質で礫を多量に含んでいた。遺構は存在せず、２・３層からも遺物はほとんど出土しない。

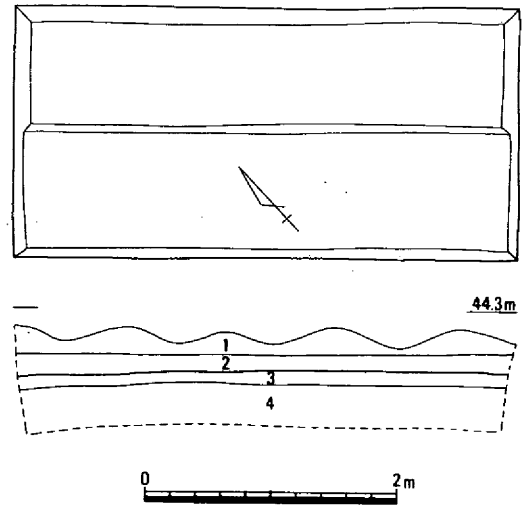
Ｔ26（第38図、図版13－１）

Ｔ26は、調査区の南西端に位置し、北東側約58ｍ付近にＴ27が、東側約54ｍ付近にＴ28が存在する。現表土の標高は約41ｍで、東側高所から西側に下る地形の途中にある。調査の結果、堆積土は東側から西側に下る傾向があり、４層以下は河道の底土と同様の青灰色土であった。遺構は存在しない。



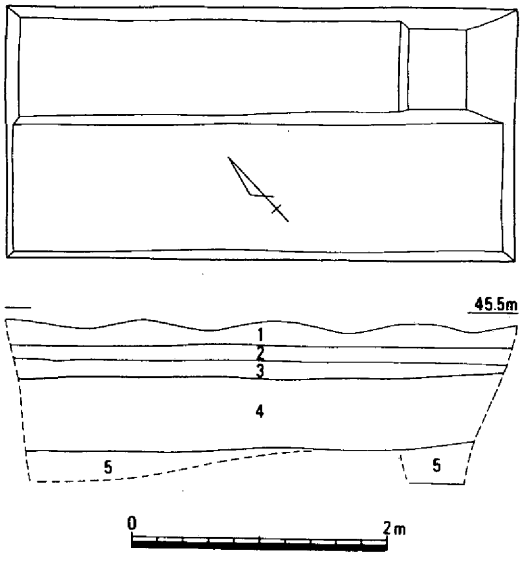
1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質土＜Ｆｅ含＞
3　灰色粘質微砂＜Ｍｎ少量・礫多量含＞
4　暗灰色砂質土＜硬質＞

第35図　Ｔ23平・断面（1/60）



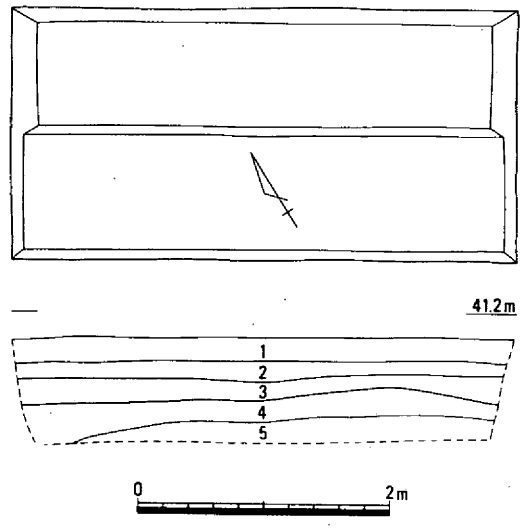
1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　淡灰色粘質土
3　灰色粘質微砂＜Ｆｅ多量含＞
4　灰色粘質微砂＜20～30㎝前後の礫多量含＞

第36図　Ｔ24平・断面（1/60）



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質細砂
3　暗灰色粘質細砂
4　白灰色粘質微砂（地山）
　＜Ｆｅ含、10～20㎝前後の礫多量含＞
5　淡灰色粘質土

第37図　Ｔ25平・断面（1/60）

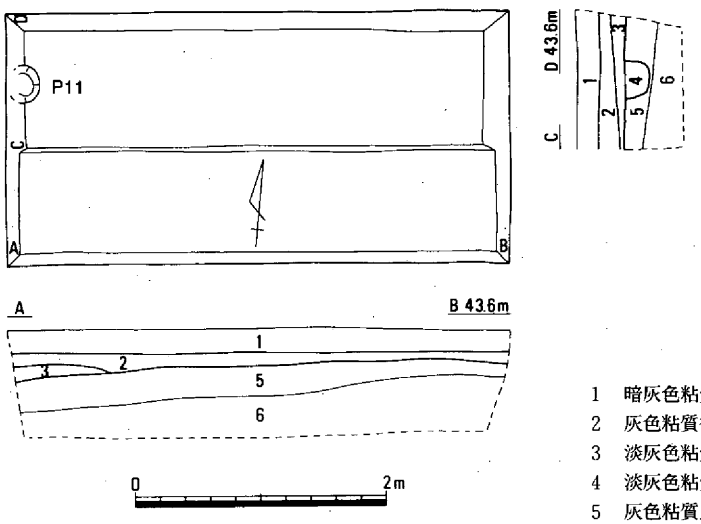


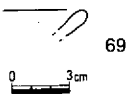
1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質細砂＜Ｆｅ含＞
3　淡灰色粘質土＜Ｍｎ含＞
4　青白色粘質細砂（地山）＜10㎝礫含＞
5　青灰色粘質細砂

第38図　Ｔ26平・断面（1/60）

Ｔ27（第39図、図版13－２・18－２）

Ｔ27は、調査区の中央部よりやや南部に位置する。北西側約42ｍ付近にＴ23が、北東側約56ｍ付近にＴ24が、南側約32ｍ付近にＴ28が位置する。現表土の標高は43.5ｍで、Ｔ28のある区画とともに調査区内では高所になり、北西と西側に向かって下っている。調査の結果、表土下30cmでトレンチ内の西側に中世の包含層（３層）があり、**69**が出土する。**69**は土師器の鍋になる。３層下からＰ11を検出する。Ｐ11は径30cmの円形で、深さは20cmである。遺物は出土しないが、検出面から中世段階のものと思われる。５層以下の層は鉄分や礫が多く、遺構・遺物は発見できなかった。





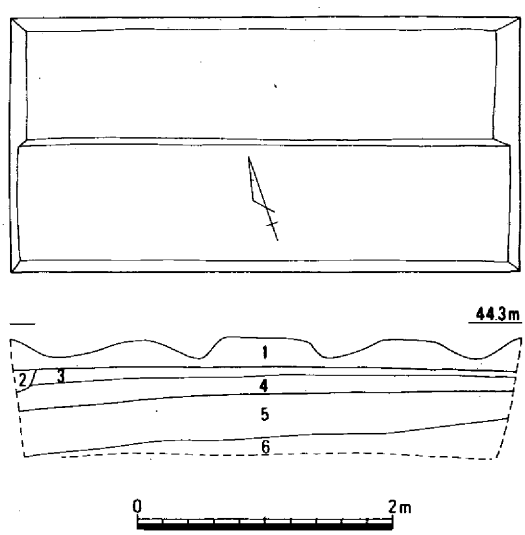
1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂＜Ｆｅ含＞
3　淡灰色粘質土（中世包含層）
4　淡灰色粘質土（中世土壙）＜Ｍｎ含＞
5　灰色粘質土（中世面）＜Ｆｅ多量含＞
6　白灰色粘質土＜Ｆｅ多量含、20～30cm前後の礫含＞

第39図　Ｔ27平・断面（1/60）・出土土器（1/4）

Ｔ28（第40図、図版13－３）

Ｔ28は、調査区中央部よりやや南東側に位置する。北側約32ｍ付近にはＴ27が、西側約54ｍ付近にはＴ26が、南側約54ｍ付近にはＴ29が存在する。現表土の標高は約44.2ｍでＴ27同様高所に位置し、西側と南西側が下る地形になる。調査の結果、耕作土直下から中世面である３層が現れる。３層上面では２層が検出でき、水田の跡ではないかと思われる。また中世の土器が若干出土する。この２層はトレンチの西端のみで検出され、東側には伸びない。３層以下を掘り下げたが礫と鉄分を多量に含む層が続く。上層は、東側が高く西側に行くにつれて低くなる傾向がある。３層以下からは遺物の出土もなく、遺構も検出されなかった。

Ｔ27・Ｔ28は同レベルにあり中世層が若干存在するが、いずれも地形的には低い西側に偏る傾向がある。



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質土（中世水田層）
3　灰色粘質微砂（中世面）
4　淡灰色粘質土＜Ｍｎ含、10～20cm礫含＞
5　橙色粘質土＜Ｆｅ含、10～20cm礫含＞
6　淡橙色砂質土＜Ｆｅ含、10～20cm礫含＞

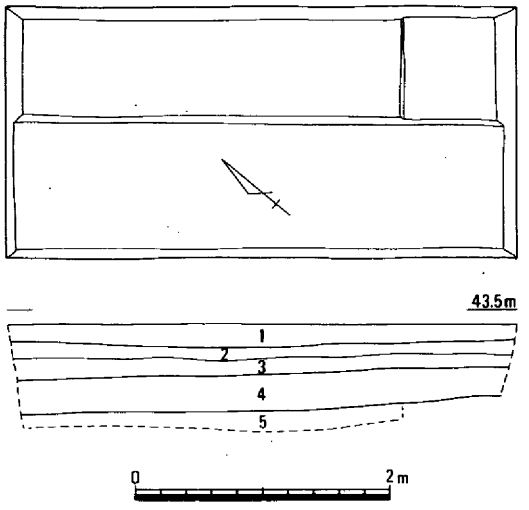
第40図　Ｔ28平・断面（1/60）

Ｔ29（第41図、図版14－１）

Ｔ29は、調査区の南側に位置する。北側約54ｍ付近にＴ28が、南東側約38ｍ付近にＴ30が存在する。現表土の標高は約43.4ｍで、高所のＴ28付近から南西方向に下る地形の途中にある。調査の結果、堆積層は若干西側に傾き、明確な基盤層は存在しない。遺構はなく、３層から瓦質土器が少量出土する。

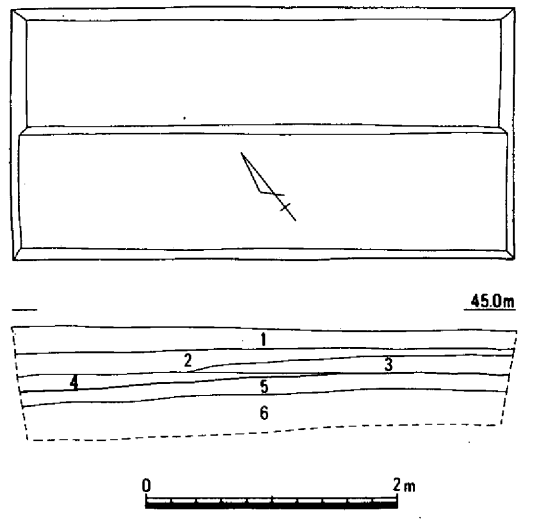
Ｔ30（第42図、図版14－２）

Ｔ30は、調査区の南端部に位置する。北東側約38ｍ付近にＴ29が存在する。現表土の標高は約44.8ｍで、Ｔ28方向と南東方向から下る地形の間にある。調査の結果、堆積土はＴ29方向へ向かって下る傾向があり、Ｔ29と同一の谷部であったと考える。



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂＜Ｆｅ含＞
3　淡灰色粘質土＜Ｍｎ含＞
4　青白色粘質細砂
5　青灰色粘質細砂

第41図　Ｔ29平・断面（1/60）



1　暗灰色粘質土（耕作土）
2　灰色粘質微砂＜Ｆｅ含＞
3　淡灰色砂質土
4　淡灰色粘質土＜Ｍｎ少量含＞
5　白灰色粘質細砂＜10cm前後の礫多量含＞
6　白灰色粘質土＜Ｆｅ多量含＞

第42図　Ｔ30平・断面（1/60）

調査の結果

今回の調査の結果、遺跡の性格や広がりをある程度確認することが出来た。以下その成果をまとめる。

上山遺跡の10箇所あるトレンチの中で、遺物が最も出土したのはＴ21である。Ｔ21は今回調査したトレンチの中で、最も標高が低い場所にあり、遺物の出土が最も少ないであろうと予想していた場所である。Ｔ21から出土した遺物はコンテナ１箱分あり、これは神之脇遺跡と合わせても一番多い遺物量である。その大半は弥生時代中期中葉のものであり、神之脇遺跡で最も多く出土した土器と大差ない時期のものである。土器の大半は破片資料で、埋土には多量の礫が含まれていた。これらの破片は

第43図　上山地区遺跡推定範囲（1/2,000）

溝４から出土しており、埋土には礫を多量に含んでいることから、近隣地区から流れてきたものと判断する。現在の地形では、Ｔ21のある区画より北東方向の区画が高く、西方向が低くなる。このことから溝４は、北東方向から流れてきて、Ｔ21のある区画内で西方向にに折れ曲がり流れていくと考えられる。溝４出土の多量の土器は、本来北東方向の区画にあったものと思われる。よってＴ21区画の北東方向には弥生中期中葉の集落がある可能性が出てきた。

Ｔ22では、中世段階の土器が若干出土する。出土した土層は、黒灰色の粘質土である。この土層は溝や河道などの底にたまる土層であり、Ｔ22全体が、河道などの中に含まれていた可能性が強い。Ｔ21同様、Ｔ22周辺も北東方向が高いため、北東区画には弥生集落のみでなく、中世集落が存在した可能性が強い。

Ｔ27・Ｔ28周辺は、平面的には舌状の張り出しが見られた。調査の結果、Ｔ27では柱穴が１基、Ｔ28では水田層があるが、どちらもトレンチ内では低位になる西側にあった。これらが検出された基盤層には、礫が多量に含まれており生活面には適さない。Ｔ24・Ｔ25も高位に位置するが、基盤層が礫を多量に含む層であったため、遺構・遺物は発見できなかった。

Ｔ26基盤層は青灰色を呈し、河道直下の堆積土に似る。Ｔ27などのある高まりから、下ってきた谷部になると思われる。Ｔ29の堆積土からは水の沸き、Ｔ30では多量に礫を含む層になった。どちらのトレンチの位置もＴ28などのある高まりから下ってきた位置にあり、谷部であると思われる。

トレンチ一覧表

調査区		遺構・包含層				遺物			備考
遺跡名	トレンチ	面数	種類	深さ(cm)	海抜高(m)	量	種類	時代	
神之脇遺跡	T1	0				△	須恵器	古墳	
	T2	0				△	亀山焼	中世	
	T3	2	ピット・包含層	50・80	37.6・37.3	△	弥生土器・鉄滓	弥生～中世	
	T4	0				△	弥生土器	弥生	
	T5	1	溝	30	35.6	―	須恵器	古墳	
	T6	2	溝・柱穴	50・100	35.8・35.3	○	弥生土器	弥生	
	T7	2	柱穴・包含層	30・70	47.0・46.5	◎	弥生土器・須恵器・土師器	弥生～中世	
	T8	0				△	亀山焼・土師器	中世	
	T9	1	溝			△	土師器	中世	
	T10	0				×			
	T11	0				×			
	T12	1	柱穴	90	39.0	○	弥生土器	弥生	
	T13	1	包含層？			○	弥生土器・石器	弥生	
	T14	1	たまり			△	土師器・石器	弥生～中世	
	T15	0				×			
	T16	1	ピット			×			
	T17	0				×			
	T18	0				×			
	T19	0				―	土師器	中世	
	T20	0				×			
上山遺跡	T21	1	溝	40	39.4	◎	弥生土器・石器	弥生	
	T22	1	溝か河道			△	土師器	中世～近世	
	T23	0				×			
	T24	0				―	土師器	中世	
	T25	0				×			
	T26	0				×			
	T27	1	ピット			△	土師器	中世	
	T28	1	水田？			―	土師器	中世	
	T29	0				―	土師器	中世	
	T30	0				―	土師器	中世	

１「遺物量」は整理箱半分以上を◎、1/3程度を○、それ以下で図化した遺物があるものを△、図化してないものを―、遺物が存在しないものを×とする。
２「遺構の種類」の内、明らかに柱穴であるものを「柱穴」、柱穴状のものをピットと表す。
３「包含層の深さ」は、安定した基盤層のもののみ表す。

第４章　まとめ

今回、神之脇遺跡と上山遺跡の２つの確認調査を実施した結果、今まで発掘調査が行われた事のなかった南山田地区の特性を、僅かではあるが垣間見ることが出来た。ここでは調査結果を整理した後、南山田地区が矢掛町内で、考古学的にどのような位置付けになるか考えてみたい。

神之脇遺跡では、２つの微高地を想定した。１つはＴ７付近とその西側であり、２つ目はＴ３・Ｔ５・Ｔ６・Ｔ12付近を取り巻く部分である。前者では弥生時代中期から中世にかけての遺物が出土し、後者では弥生時代中期から古墳時代の遺物が出土する。どちらの微高地も複合した時代の遺跡になるが、その中心は弥生時代中期といってよい。

上山遺跡では、明確な微高地を確認出来なかったが、Ｔ21において多量の弥生土器片が出土する。出土土器の大半は、神之脇遺跡の中心的な時代となった弥生時代中期のものである。特に両遺跡とも中期中葉の時期が主流で、この時期のまとまった資料は矢掛町内においても珍しい。

その後の時期として、神之脇遺跡Ｔ12のＰ８が弥生時代後期で、同じくＴ５の溝１は古墳時代後期になるが、弥生時代中期に比べれば圧倒的に少ない。このことをまとめてみると、南山田地区は弥生時代中期にはある程度の規模の遺跡が存在するが、弥生時代後期以降古墳時代にかけて遺跡の量が激少する。この流れは、南山田地区と北節する里山田・中などの地区とは違った流れである。南山田地区を考える場合、矢掛町の中心的役割を担う矢掛・東三成・里山田・中地区との比較が重要と考える。これらの地区は矢掛町の中心に位置するだけではなく、発掘調査も何件か行われている地区でもある。以後弥生時代からではあるが、これらの地区と南山田地区をたした範囲内で、遺跡の変遷を追ってみたい。

弥生時代前期（第44図）

弥生時代前期の遺跡は数も限られ、また地域も限られる。東三成の奥迫遺跡と吉野遺跡、里山田の清水谷遺跡である。この内清水谷遺跡は、南北約70ｍ・東西約60ｍの環濠を有した集落で、前期の集落としては全国屈指の遺跡である。集落の西側には水田の跡もあり、集落域と生産域をともに有している。時期は前期でも中葉から始まり、中期の前葉まで続く。吉野遺跡は後葉の時期で、土器棺墓が発見される。奥迫遺跡は、土器片のみしかないが、前期中葉の時期である。

奥迫遺跡で発見された土器は量が少なく、本格的な集落は今のところ清水谷遺跡だけである。まだ周りにほとんど遺跡が存在しない時代に、里山田と東三成のみに遺跡が現れることは、この２つの地区が

第44図　弥生時代前期の遺跡

よほど良好な土地であったのだろう。以後もこの2つの地域に中を加えた地区は、特に弥生後期から古墳時代にかけて遺跡が集中して築かれる。南山田地区は、未だ遺跡は現れない。

弥生時代中期（第45図）

中期でも前葉の時期は、未だに清水谷遺跡の環濠集落は存在する。ただし中葉には姿を消し、遺跡は町内に点在するようになる。南山田地区にも神之脇遺跡と上山遺跡が現れる。また、竹林寺山の北斜面にある地蔵岩遺跡でも中期の土器片が出土する。東三成では土井遺跡、奥迫遺跡東土井・西土井地区と東山に散布地などがある。里山田の清水谷遺跡でも土器片が出土しているが、遺跡は環濠集落のあった場所より西側の尾根沿いに移る。中地区でも白江遺跡から土器片が出土する。遺跡の立地は奥まった場所が多く、この状況を『矢掛町史』では「灌漑工事が完備した水田を作る技術は、まだじゅうぶん」ではなく、「比較的簡単に水の引ける谷間など」が、「むしろ水田化には有利」だったと考える(1)。この説は、後期になって里山田などの地区に遺跡が集中して築かれる現象を考えると説得力のつよい説である。

この説に加えて、南山田地区に神之脇遺跡や上山遺跡が現れる意義ついて考えてみたい。この時期の中心地は、未だ調査によって明らかにはされていないが、やはり清水谷遺跡や白江遺跡のある里山田や中地区であったろう。南山田地区には神之脇遺跡と上山遺跡の他に、竹林寺地蔵岩遺跡がある。またさらに南に進み、竹林寺山を越えた鴨方町内には段林遺跡(2)などが存在する。遺跡は里山田地区・南山田地区・鴨方町へと、南北に点在している。この時期矢掛町内の遺跡は、竹林寺山や遙照山を越えて鴨方町との交流が盛んだったのではないかと考える。その交流の拠点として神之脇遺跡や上山遺跡が栄えたのではないか。この時期には南山田地区も竹林寺山・遙照山ルートを背景に、里山田や中地区と互角に渡り合っていたものと思われる。

第45図　弥生時代中期の遺跡

第46図　弥生時代後期の遺跡

弥生時代中期後葉～後期（第46図）

弥生時代中期後葉から特に後期にかけて、遺跡は里山田地区と中地区の尾根裾沿いに集中して築かれる。尾根裾沿いに遺跡のない場所がなくなるくらいである。その分布は道々川によって開かれた平地を巡るように存在する。里山田地区ではどの遺跡も全面的な調査により実態が明らかになったものは少ないが、確認調査等の成果はこの地に大集落の存在を十分期待させる。中地区では、白江遺跡で多量の土器が出土しており、やはり近隣には大集落があるであろう。白江遺跡の東の尾根上に位置する芋岡山遺跡は、30基ほどの土壙墓が点在する集団墓である。また中池ノ内遺跡は、竪穴住居と土壙墓をともに兼ね備えている。

広大に開けた扇状地が道々川周辺に存在するが、この土地利用方法は清水谷遺跡一本木地区の調査成果によって明らかとなる。調査の結果、この地において水田層を検出している。清水谷遺跡一本木地区は、里山田・中地区の平地部では北西端に位置する。平地部全体の中では一部にしかならないが、この調査成果によって平野部の土地利用の一角が判明した。清水谷遺跡一本木地区検出の水田層が道々川周辺一帯を巡っていた場合、里山田・中地区の裾部に集落が集中する理由が説明できる。

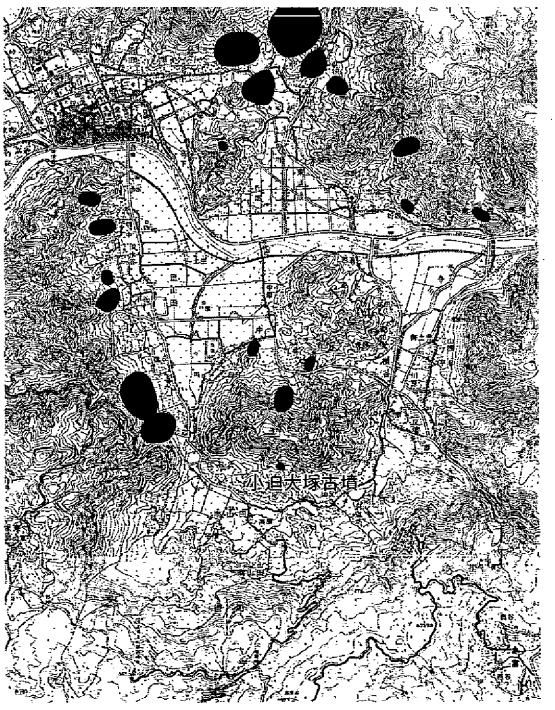
また中地区では、集落域だけでなく芋岡山遺跡や中池ノ内遺跡のような墓域も備えており、里山田地区でもこの時期の墓域が存在するとの報告がある(3)。この地域は集落・生産基盤とともに墓域も備えており、一大勢力であったろうと考えられる。

東三成にも遺跡は多く、奥迫遺跡赤岸地区では竪穴住居があり、沖の後地区でも土器が出土する。東三成地区も里山田や中地区ほどではないが、弥生時代を通じて栄えた地域である。

里山田や中で遺跡が集中する一方で、南山田には神之脇・上山遺跡で僅かに遺構・遺物が存在する以外は皆無な状態になる。遺跡の分布を見ると、里山田の尾根裾に続く遺跡は焼山・中山の手前で急になくなる。ただし前時期にあった竹林寺山・遙照山ルートは途切れたわけではないようである。山を越えた鴨方町内の和田遺跡(4)では、芋岡山遺跡や里山田上谷遺跡にある特殊器台が出土する。この時期の竹林寺山・遙照山ルートの交流は、南山田の手は借りず、里山田・中勢力が直接行っていたであろう。

古墳時代（第47図）

古墳時代、とりわけ古墳の分布は、弥生時代後期の分布と重なる。弥生時代後期に栄えた集落は、そのままの勢いで古墳時代を迎えたのであろう。里山田には畑中古墳群・土井古墳群・池尻古墳群・三頂山古墳群・四頂山古墳群・橋本古墳群など焼山の北側まで古墳群が続くが、その流れは南山田まで続かない。それどころか南山田には古墳群が全く存在しない。ただし後期古墳としては町内最大で、岡山県内をみても著名な存在である小迫大塚古墳がただ1基だけ存在する。小迫大塚古墳の存在は、未だ竹林寺山・遙照山ルートの交流が重要な位置を占めてい



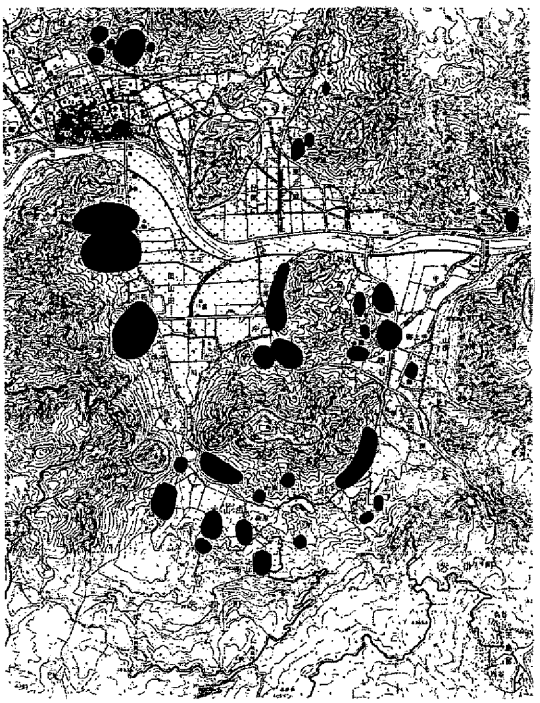
第47図　主な古墳群の位置

たことを示唆する。ただし今回調査した神之脇遺跡・上山遺跡ではそれを支える生活基盤はほとんど確認できず、その存在は小字でいうと小迫や南原にあったのであろう。

中世（第48図）

中世には町内の各地に遺跡は広がる。南山田地区でも広い範囲で遺物が散布する。ただし城の存在は北西端にある焼山城しかなく、必ずしも開けていた地域とは言えない。

新たに遺跡が密に集中する地域として、横谷地区がある。横谷地区は里山田・中地区などと同様に小田川流域のすぐ南側に位置し、広い平野部を有している。中世段階にこの地区が開けるのは、当時備中南部地区最大を誇った猿掛城と、その城を居城とする庄氏の存在が大きいと思われる。



（スクリーン部は城址）

第48図　中世の遺跡

以上のことをまとめると、南山田地区は弥生時代中期には竹林寺山・遙照山ルートの交流により、小田川流域にある里山田・中地区と肩をならべていた。しかし弥生時代後期になると、勢力は急速に衰え、その流れは古墳時代まで続く。ただし唯一小迫大塚古墳は存在し、竹林寺山・遙照山ルートの交流が依然重要な位置を占めていたと窺える。南山田地区は鴨方との交流によって、どの時代においても重要な位置付けは果たすものの、小田川に近接した地域の勢力が常に優位に立っていたものと思われる。

最後になるが、今回調査を行ったトレンチの面積は両遺跡をあわせて240㎡である。これは、圃場整備予定面積の0.002%にしかならない数字である。また調査を行ったトレンチ内でも－１ｍ～－1.5ｍの深さまでしか調査していない。調査を行った隣の区画や、トレンチ内でも更に下層から、遺構・遺物が発見される可能性も否定できない。

註

（１）間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司「第二章　郷土のあけぼの」『矢掛町史』矢掛町史編纂委員会　1982年

（２）小林利晴・内藤善史「段林遺跡・段林古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』132　岡山県教育委員会　1998年

（３）武田恭彰「第Ⅳ章第１節　遺構について」『清水谷遺跡』矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告１　矢掛町教育委員会　2001年

（４）伊藤　晃・浅倉秀昭・江見正己「和田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42　岡山県教育委員会　1981年

付載　神之脇遺跡Ｔ３出土炉壁片の調査

（株）九州テクノリサーチ・TACセンター
大　澤　正　己

概要

中世に属する神之脇遺跡から出土した炉壁片3点を調査して、次の点が明らかになった。

〈１〉外観：供試材は、胎土がスサ入り粘土の炉壁溶融物である。黒色ガラスの溶融物の中には未溶融の石英粒を残存させる。色調は茶褐色から灰黒色で局部的に鉄銹が覆う。

〈２〉マクロ組織：炉壁内面表層部に白色雪花状結晶のマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）が局部的に晶出する。……Photo.3参照。

〈３〉顕微鏡組織：3片の炉壁片は、いずれも暗黒色ガラス質スラグ中に白色雪花状結晶で占められる。分散晶出か凝集晶出の差異はある。……Photo.1、2参照。

〈４〉ビッカース断面硬度：白色雪花状結晶の5点中の4点の硬度値は503～548Hvを呈した。マグネタイトの文献硬度値は500～600Hvであって、マグネタイトに同定できる。(注1) ……Photo.1の①④、Photo.2の⑦⑧参照。

〈５〉EPMA調査：白色雪花状結晶の定量分析値は92～94％FeOからマグネタイトに同定される。当結晶及び基地の溶融ガラスからはTi、V、Zrなど砂鉄特有成分の検出はない。砂鉄系製鉄炉の炉壁は否定される。……Photo.4参照。

〈６〉化学組成分析：ガラス分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）主体で89.76～91.90％を占める。鉄分（Total Fe）は僅かの3.36～6.64％止まりである。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）は0.20～0.26％、バナジウム（V）0.001％以下であった。また、銅（Cu）も0.001以下と少ない。鉄関連炉壁の可能性が高い。……Table.2参照。

結論

鉱石系製鉄炉の炉壁か、鋳造溶解炉の炉壁が候補に挙がる。鉄滓の出土が1点もないところから後者の可能性が高い。炉壁には緑青の発生がなく、溶融物は鉄とみるべきであろうか。ただし、銅を完全に無視する訳にはいかない。

注）

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968.　ヴスタイトは450～500Hv、ファイヤライトは600～700Hv、マグネタイトは500～600Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルは硬度値範囲の明記がないが、EPMAの組成調査と硬度値を対応させると600～700Hv以上はウルボスピネルと同定される。

Tabie.1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値 大きさ(mm)	計測値 重量(g)	メタル部	調査項目 マクロ	調査項目 顕微鏡 組織	調査項目 マトリックス 硬度	調査項目 ×線	調査項目 CMA	調査項目 中	調査項目 中沢大観	調査項目 ICP-…	備考
KMW-1	神之脇	T3地層上面	伊賀溶融物	中世？	90×85×74	538.3	なし	○	○	○		○	○			
KMW-2	神之脇	T3地層上面	伊賀溶融物	中世？	54×53×29	67.8	なし		○			○	○			
KMW-3	神之脇	T3地層上面	伊賀溶融物	中世？	18×14×13	5.2	なし	○	○	○						

（＊4点調査

Table 2 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	酸素 (O)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分 Total Fe	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe
KMW-1	神之脇	T3地層上面	伊賀溶融物	中世？	6.64	<0.01	1.57	7.73	70.39	11.69	2.08	0.27	4.83	0.82	0.08	0.26	0.03	<0.01	0.12	90.29	<0.01	<0.01	89.74	13.515	0.030
KMW-2	神之脇	T3地層上面	伊賀溶融物	中世？	3.36	<0.01	1.36	3.28	72.7	12.83	0.86	0.30	4.45	0.86	0.05	0.26	0.03	<0.01	0.08	90	<0.01	<0.01	91.83	27.360	0.077

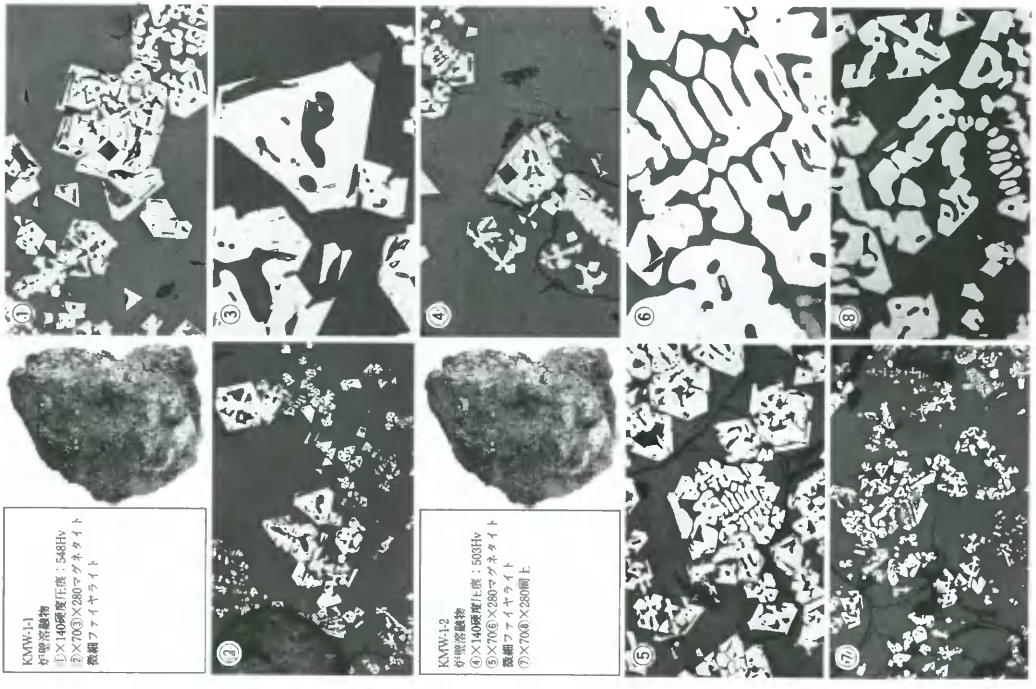


Photo.1　炉壁溶融物の顕微鏡組織

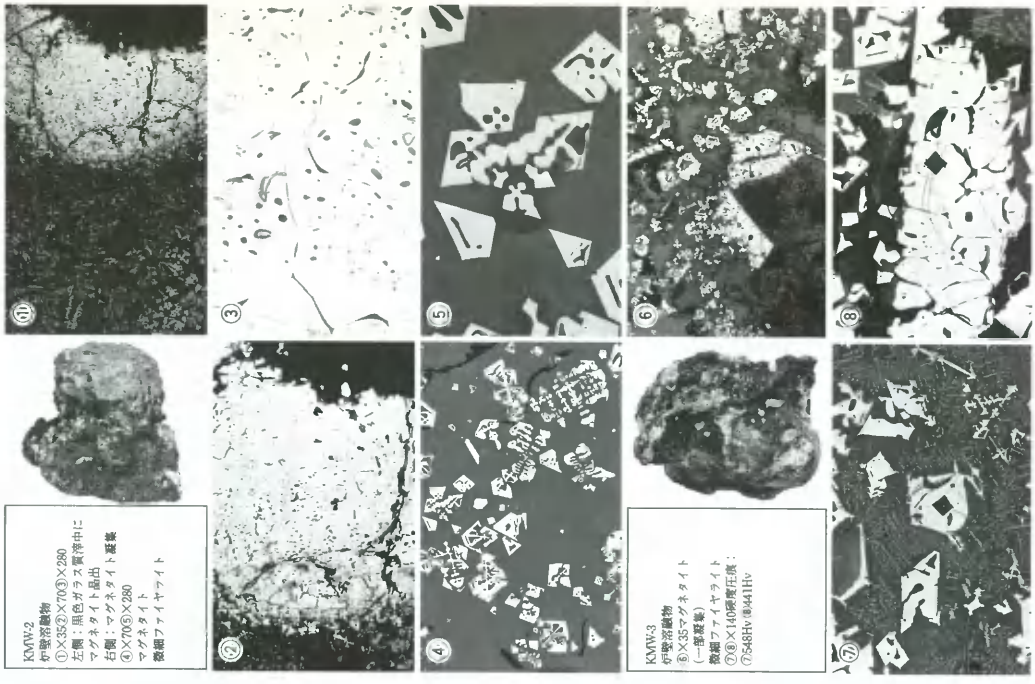
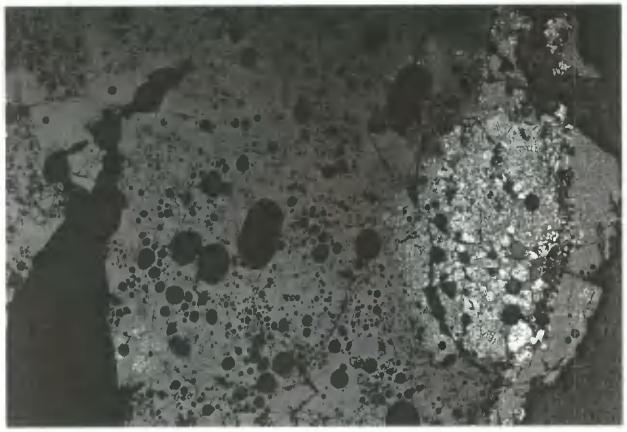
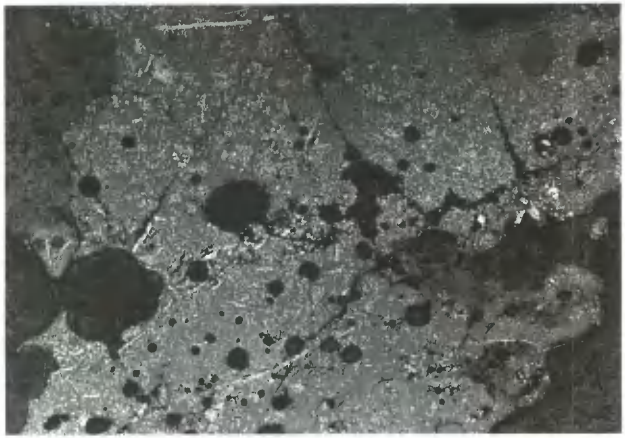


Photo.2　炉壁溶融物の顕微鏡組織



ＫＭＮ－１－２　×10

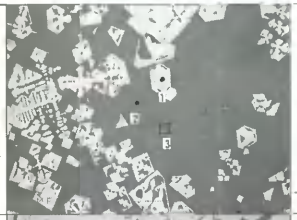


ＫＭＮ－３　×10

Photo.3　炉壁溶融物のマクロ組織（×7）
上段：KMW-1-2　下段：KMW-3

COMP ×140

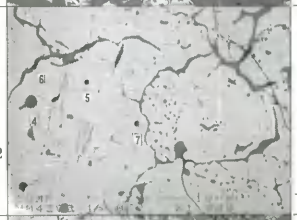
KMW-1



Element	1	2	3
F	-	-	-
Na_2O	-	0.353	0.479
MgO	0.294	0.628	0.612
Al_2O_3	**2.225**	**8.775**	8.974
SiO_2	0.252	**57.736**	**57.889**
P_2O_5	0.003	0.343	0.403
S	0.011	-	0.005
K_2O	0.005	**2.602**	3.776
CaO	-	**7.944**	7.463
TiO_2	0.160	0.050	0.060
Cr_2O_3	0.046	0.015	-
MnO	0.144	0.336	0.313
FeO	**94.092**	**23.494**	**21.258**
ZrO_2	0.031	-	-
V_2O_5	0.044	0.015	-
Total	97.304	102.291	101.231

COMP ×700

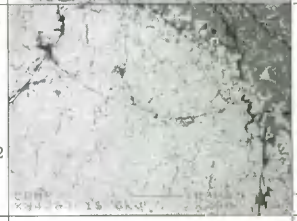
KMW-2



Element	4	5	6	7
F	0.070	-	-	-
Na_2O	0.529	-	0.305	-
MgO	0.655	0.032	2.177	**2.944**
Al_2O_3	10.341	1.309	**5.838**	**2.779**
SiO_2	49.697	0.058	**51.668**	0.115
P_2O5	0.093	0.003	**0.809**	-
S	0.003	0.003	-	0.006
K_2O	2.037	-	**0.693**	-
CaO	12.465	-	14.733	-
TiO_2	0.066	0.178	-	-
Cr_2O_3	0.067	-	0.046	**0.031**
MnO	0.285	**0.141**	**0.507**	**1.329**
FeO	16.696	91.748	18.239	87.284
ZrO2	-	0.028	0.021	-
V_2O_5	0.016	0.038	0.078	0.050
Total	92.990	93.537	95.114	94.537

COMP ×140

KMW-2



Element	8
F	0.216
Na_2O	0.610
MgO	0.486
Al_2O_3	12.439
SiO_2	70.211
P_2O_5	0.135
S	0.012
K_2O	3.321
CaO	3.873
TiO_2	0.047
Cr_2O_3	-
MnO	0.275
FeO	7.964
ZrO_2	-
V_2O_5	0.008
Total	99.503

Photo.4　炉壁溶融物のEMPA分析結果

1　神之脇遺跡全景
（北東から）

2　上山遺跡全景
（北西から）

3　上山遺跡全景
（南西から）

図版2

1　Ｔ１（南西から）

2　Ｔ２（南西から）

3　Ｔ３（南西から）

1　Ｔ４（東から）

2　Ｔ５（北西から）

3　Ｔ７（西から）

図版4

1　Ｔ６（南西から）

2　Ｔ６北壁
（南から）

3　Ｔ６下層
（北西から）

1　Ｔ８（南東から）

2　Ｔ９（西から）

3　Ｔ10（南西から）

図版6

1　T11（西から）

2　T12（西から）

3　T12断面
（南西から）

1　T13（南東から）

2　T14（南西から）

3　T15（南東から）

図版8

1　T16（西から）

2　T17（北東から）

3　T18（西から）

1　T19（南西から）

2　T20（南東から）

3　T３埋め戻し
（西から）

図版10

1　Ｔ６埋め戻し
（東から）

2　Ｔ８埋め戻し
（南東から）

3　Ｔ９埋め戻し
（西から）

1　T21（南西から）

2　T21土器出土状況
（東から）

3　T22（西から）

図版12

1　T23（南西から）

2　T24（南から）

3　T25（南西から）

1　T26（南東から）

2　T27（南東から）

3　T28（南東から）

図版14

1　T29（南から）

2　T30（南から）

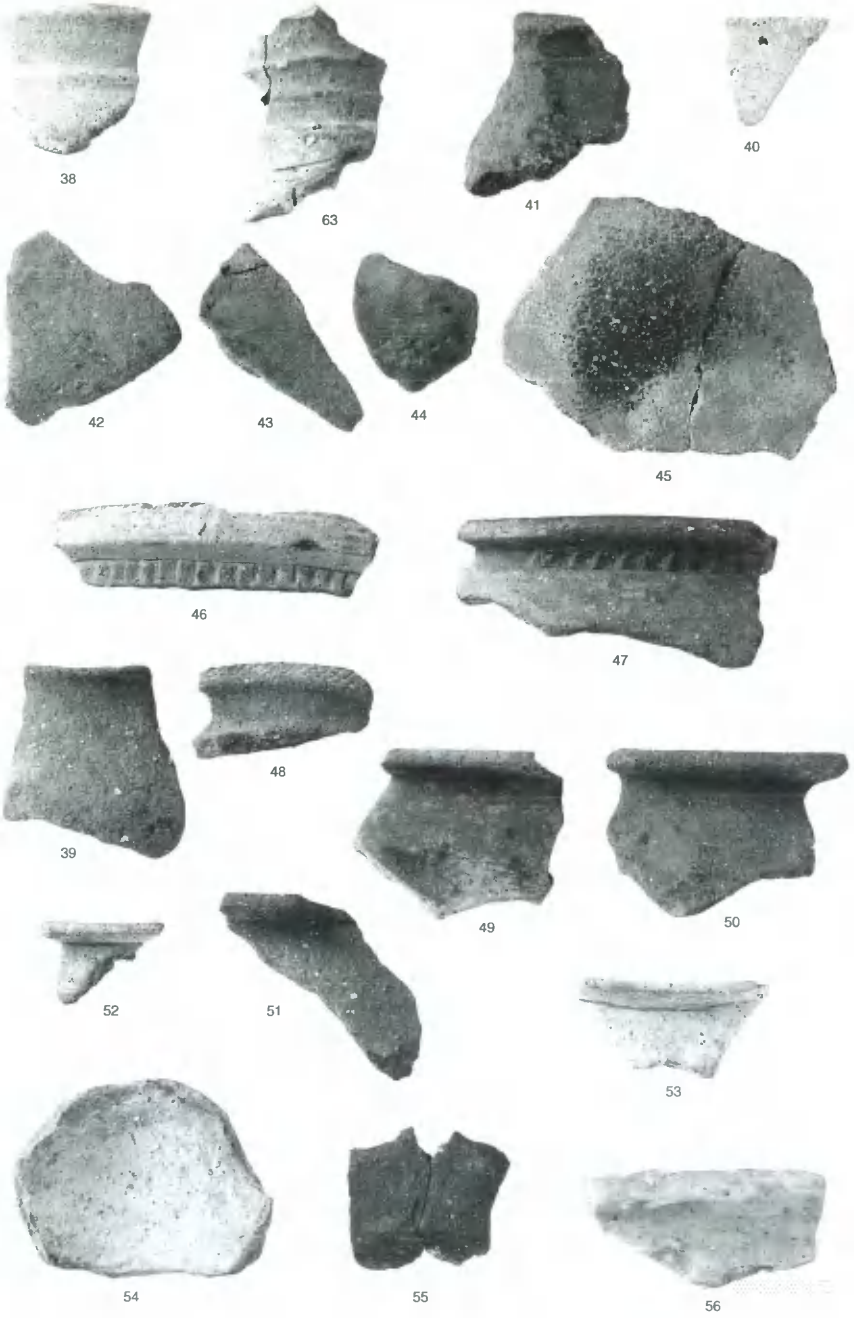
3　T23調査風景
（北西から）

1　神之脇遺跡Ｔ７出土土器

2　神之脇遺跡Ｔ６出土土器

1　神之脇遺跡Ｔ12・13・14出土土器

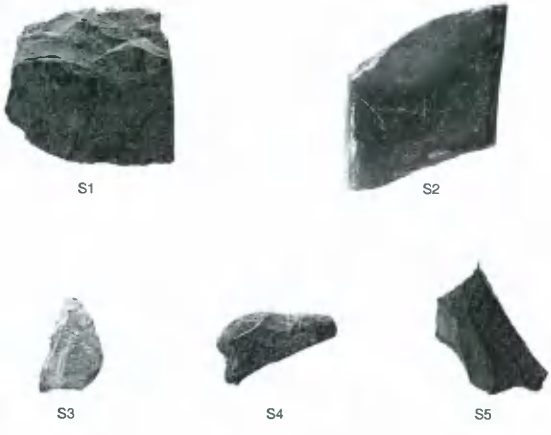
2　神之脇遺跡Ｔ１・２・３・４・８・９出土土器



1　上山遺跡T21出土土器①

1　上山遺跡Ｔ21出土土器②

2　上山遺跡Ｔ22・27出土土器



3　神之脇・上山遺跡出土石器

報告書抄録

ふりがな	こうのわきいせき
書名	神之脇遺跡ほか
副書名	矢掛町南山田地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	169
編著者名	小林利晴　大澤正己
編著機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL　086-293-3211
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市内山下2-4-6　TEL　086-224-2111
発行年月日	西暦2002年　3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
こうのわきいせき 神之脇遺跡ほか	岡山県 おだ 小田郡 やかげ 矢掛町 みなみやまだ 南山田	33461		34° 35′ 17″	133° 36′	2001.11.05 ～ 2001.12.21	240	県営圃場 整備事業 に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神之脇遺跡ほか	集落	弥生時代 ～ 中世	柱穴　溝	弥生土器・土師器・須恵器・亀山焼・石器（槍・包丁・スクレイパー）	

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告169

神之脇遺跡ほか
矢掛町南山田地区県営圃場整備事業に伴う確認調査

平成14年3月20日　印刷
平成14年3月31日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山県岡山市西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山県岡山市内山下2-4-6

印刷　サンコー印刷株式会社
岡山県総社市真壁871-2